卓球少女

希鈴レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卓球少女

【Nコード】

N3209W

【作者名】

希鈴レッド

【あらすじ】

高校二年生になる清水悠斗は、突然女子中学二年生の野宮美雪に部活存続のためにコーチを頼まれる。そして悠斗は、女子卓球部に訪れると、美雪をあわせた六人の卓球部がいた。これから悠斗はこの六人の少女たちとともに夏季大会を目指して日々を過ごしていく。恋愛スポーツストーリー。

第1話「始まりの軌跡」

春休み、俺 清水悠斗しみずゆうとは、数日で高校二年生になる。勉強とかも大変になっていくことだろう。将来も決まっていけないというのに……このまま学年が上がってもいいのだろうか……。

赤点は取らないが、テストはだいたい平均以下だし、実技もだいたいダメなんだよな……。けど、一つだけ才能と言えば才能というもある。

それは、子供の頃からやっている卓球だ。上手い方だとは思う。中学校の時は部長になり、みんなを全国まで行かせたことがある。日本一にはなっていないけど。

けど、体育はダメなんだよね、俺って。

話を戻すけど、春休み。俺はこの選択で良かったのか今は悩んでいる。普通の高校生活だと思っていたが、まさかこうなるとは予想もしていなかった。

春休みに入って、市民総合体育館で俺はただ適当に相手探して卓球をやるうとしていたら、中学生くらいの女の子が複数の男子に囲まれていじめられているではないか。

「なんでそんな根暗で地味なやつやってるんだよお」

「そうだけ！俺たちとバスケやるうぜ！」

「い、いいもん！卓球をバカにする人たちとなんか、スポーツしないもん！」

同意だ。俺もしたくない。だから俺は止めに入り、男子たちを追い払った。

「大丈夫か？」

と俺は女子中学生に言う。

「はい。ありがとうございます」

「そうだ。今日は相手がいらないから、卓球一緒にやらないか？」

「は、はい！ 私も困っていたんです！」

「だろうな。周りは誰もいないし、男子たちにいじめられてたしな。」

「よし、やろう！」

「それで、その女子中学生と卓球をする。」

「！」

「やっっている途中に女子中学生の手が止まる。」

「あなたは……」

「……？」

「意味が分からなかった。どっかで会ったことあったっけ？」

「あの……経験者ですよ？」

「ああ、それに気付いたってわけか。びっくりしたよ。」

「そうだけど？」

「あの、お願いです！ 私の学校の卓球部を助けてくれますか？」

「え？」

「急なお願いだった。だから、ついオーケーしてしまった。」

少女の名前は、野宮美雪^{のみやみゆき}。大学や高校も付属である、姫原女子中学校出身だ。そう、女子校だ。

男の俺が女子中学生の卓球部を存続させるように、コーチを頼んでいるのだ。どうやら、顧問の先生はいなくなったらしく、部員は今も彼女一人らしい。もう廃部になりそうだったが、次の新一年生が入部してきて、夏期大会で一勝でもすれば大丈夫になるらしい。

だから、一年生が入り次第コーチをしてもらいたいということだ。

さて、これから一体どうなっていくのだろうか。

第2話「女子卓球部のコーチに」

五月になる。この中学校はこの月から部活に一年生を入れるようだ。だから一年生が入ってから、俺はこの女子校に呼び出された。校門に行くとともに冷たい視線を女子生徒たちから受ける。はっきり言うつもりはない！でも、困っているなら助けてあげないといけない。

「あ、清水さん！」

体操着に着替えている野宮さんが来てくれた。助かった。僕は清水さんに案内される。

姫原女子校はとても大きく、きれいだった。小学生も中学生も高校生も制服だ。大学生も制服を着ている。着るところもあるんだな……。

「先に入部したばかりたちの子が待ってます」

「そ、そっか。何人入ったんだ？」

「五人入りました」

へえ。それなら部員も六人になって、夏季大会の団体戦に出場できるな。

「こちらです」

当たり前だが、案内された場所は体育館だった。俺は扉を開ける。すると、

「きゃああつ！」

「なっ！」

いきなりの悲鳴に俺も声をあげそうになった。なぜこんなにびっくりされたのだろうか。……と思ってる場合じゃない。

「え、えつと……」

なんて言えはいいだろうか……。

「コーチの人？」

黄色い髪の少女が言う。あれ？ 同じ顔が二人も……双子が入部

してきたのだろうか。いや、そうなのだろう。

もう三人も特徴があるのだろうか。

眼鏡をかけてもじもじしている薄い緑の髪の子。俺をみて睨んだ感じの顔をしている、いかにもツンツンしている黒髪のロングヘアの少女。まっすぐな気持ちが見て分かる赤い髪のショートカットの少女。

「この人はこれからコーチとして教えていただく、清水悠斗さんです！」

茶色の髪的美雪がニコニコして紹介する。

「ど、どうも……」

つい照れくさくなってしまふ。女の子しかいないからだろうか。

「よろしくおねがいします！」

赤い髪の少女が元気よく挨拶してくれる。

「うん。よ、よろしく」

さあ、これから一体どうなっていくのだろうか。

えっと、赤い髪の少女の名前が、いしくんしお右黒栞。ツンツンしてる少女は、

もりかわあおい森川葵。

眼鏡つ子な少女は、たしまかなこ田島夏奈子。双子の少女は見わけがつかない……。

黄色の髪を右か左に結んでいるから、それでみんな判断しているようだ。右に結んでいるのが姉で、さとうまみ佐藤真美とゆみ友美。

全員、卓球初心者だそうだ。石黒さんのやる気は初心者だったからなようだ。

一から教えるって言うてもどこから教えればいいか分からないんだが……。

まあ、なんとかなるだろうとは思っ。

とりあえず一日目は自己紹介で終えた。この調子で存続とかやっていけるのか？ 今回は考えてない俺のせいでもあるけど。

第3話「練習開始？」

さあ、俺は今から姫原女子校へ行かなければならない。家からなら割と近いが、高校から行くと結構遠い。急いで行かなければならない。バス停へ急ぐ。

「どこ行くの？」

「え？」

振り向くとそこには中学校からの友達さくはなの咲花梨香と、小学校からの親友の桜庭圭一郎さくらばけいいちろうがいた。二人と僕は同じ卓球のクラブに入っ
て練習したりする。けど、こんなときに何の用事が……。

「まさか、彼女探しか？ 寂しいもんなお前」

別に寂しくなんかないし。圭一郎がからかってくる。

「これから急ぎの用事があるんだ！ じゃあな！」

俺はそう言い残してバスに乗った。

「こらあ！ 悠斗ったら！」

なんか梨香が怒っているが気にしない。とりあえず向かわないと
な。

なんとか部活の時間に間にあった。

「あ、悠斗さん！」

声をかけられた。赤い髪を揺らしながら、栞が近寄ってきた。

「これから向かうのか？」

「はい！ 今日もよろしくお願いします！」

そう言っ
て体育館の方まで走り去った。元気だなあ。昨日はなんにも教えられていないのに、いい子だな。

みんなもう準備が整っているようだ。ラケットまで持ってる。

「さあ、早くう！」

友美が相当元気だ。そんなに教えてもらいたいのだろうか。何か
ら教えた方がいいだろうか。

「と、とりあえず前傾姿勢をしてみようか」

「ぜんけーしせー？」

真美と友美がそろえていった。

「じゃあやってみせるよ」

俺は足の幅を大きく開いてみせる。

「え、ええっ!？」

俺から距離をとっている夏奈子が顔を真っ赤にして叫ぶ。嫌なの
だろうか。

「肩幅ぐらいいに開くのが理想かな。それで、かかるとに重心をかけず、
つま先の方に体重を」

「女の子に体重とか言う男はサイテーね。消えればいいのに」

なんか傷ついた。毒舌すぎるよ、葵……。消えればいいとか相当
効くよ……。

「葵ちゃん！ そんなこといつちやだめだよ」

「せ、先輩がそういうなら……」

美雪が助けてくれる。感謝します。

とりあえずみんなやってくれているが、これからは仲良くしてい
けるかが心配になってきたんだが。それにしても、榊がさっきから
黙りっぱなしだ。体が震えている。汗の量も他の子よりも……。前
傾姿勢はきつかったのだろうか。

「ふふふ……」

「ど、どうした？」

「？」

俺とみんなは急に笑い出した榊を見る。

目がマジだ!!

「ふふふふふ！ 早く卓球やりましょ！ 卓球！」

ラケットを大きく振る。暴走し始めたようだ。今までの元気いっ

ぱいのかわいい少女の姿がまるでない。もはや戦闘狂な感じだ。一言で表すと、怖い。

こうして、いろんなことがあって、練習が終わった。

次の日。美雪と真美と友美以外誰も来なかった。怖がられてしまったのだろうか……。

第4話「森川葵」

とりあえず、部活は中止にした。みんなが揃わなければ部活にならない。みんなが強くないと！

「悠斗さん、どこ行くんですか？」

後ろから美雪が追いかけてくる。

「みんなを集めないと。こんなばらばらだと試合も練習もできないよ。俺はコーチとしてみんなを集めないと」

「そう……ですか」

うつむく美雪に俺は肩に手を置く。

「気にするなって。みんなと仲良くなれるよう俺は頑張るから。じやあな！」

俺は美雪に踵を返してみんなを探す。けど、どうやって見つけようか……。校内に入るわけにはいかないし……。

一応校門に来た。帰っていないだろうか。外に出て辺りを見回す。

「……いた！」

長い黒の髪、今日はツイントールをしている森川葵だ。なんか苦手だが、部活に参加してと頼むしかない。

「葵！」

俺はすぐに傍に行った。

黒かばんを両手に持ちながらこちらを向く。

「何か用？」

どうしてこんな冷たく言い放つんだろう。そんなに俺が嫌なのだろうか。

「今日は部活だろ？ 来ないのか？」

「いいじゃない、別に。あたしの勝手でしょ？」

そう言っただけはまた足を進める。

「ま、待てよ！」

「ついてこないで！」

ものすごく嫌われてるんだな、俺って……。

「まだ来るの!？」

人ごみの多い商店街で葵が俺につつかかってきた。

「部活に來いって言いに來ただけだから」

「それにしても長いストーキングね」

言われなくなかった。俺も何となくそう思っていた。悪いことだ
ってことは。

「め、迷惑だったならごめん。でも、部活を存続させたいんだ!

君たちの卓球部を!」

俺の言葉に葵は目をみはる。

「それだけ?」

「それだけってなんだよ! 俺は女子卓球部を みんなを守りた
いから來てやったんだ。他に理由は無い」

つい叫んで言ってしまった。周りの人が視線を向ける。しまった
な……。

「も、もう! 迷惑よ!」

葵は顔を真っ赤にして走り出した。十字路でキョロキョロ見まわ
して適当な店に入っていくようだ。入った店が……ゲーセン!?

「って、あのゲーセンはまずい。一人の女の子を入れるわけには…
…」

俺も葵が入ったゲーセンに入る。

どこにいるんだ? ここは不良な奴らがこの時間にはけっこうい
るんだよな。ユーフォーキャッチャーのところにもいない。ガチャ
ガチャのところにもいない。ん? あの階段付近に……。

いた! やっぱり葵だ! 男三人に囲まれている。葵は涙目にな
って怖がってる。助けてあげないと。

「葵ー！！」

男たちの間に入り、葵の手を握る。

「ふ、ふえっ！？」

葵は驚いている様子だ。だが今は気にしない。

「なんだよ、お前！」

不良男子が俺に話しかけてきた。

「お、俺はこいつの彼氏ですよ、はい！ さあ行くぞ、葵！」

「ちよっ……！」

葵の手を引いて、俺はゲーセンを出て、商店街を抜ける。

俺と葵は小さな公園に入ってベンチで休むことにした。空を見上げてみると、もう一番星が出ていて、少し暗くなっていた。

「な……なんで……助けにきたのよ」

息を切らしながら葵は尋ねてきた。

「ほっとけないからにきまつてるだろ。ああやって涙目になって臆病になってる女の子を助けられないなんて、俺はしないぞ」

そういつたら葵は、

「ば、ばっかじゃないの！ 涙目になってなんかなかったし！ あと、助けてなんて頼んでないから！ まあ、あんたはお人よしそうだから来るかなとはちよっと思ったりは、したけど……」

顔を真っ赤にしながらそう言った。涙目になったところを見られて恥ずかしかつたんだらう。俺はつい笑ってしまった。

「何がおかしいのよ！」

ツインテールを揺らして葵がこっちを見る。まだ顔が赤い。

「俺、葵に苦手意識してたけど、なんかもうそんなの無くなったよ。まだ会って間もないのに。意外にかわいいな」

「な、ななな……」

葵は手を上下にぶんぶん振る。

「？」

「な、何言ってるのよ！　そうやって言ってる、部活に来てもらおうなんて思ってるのね！」

別にそういうわけじゃないけど。まあいいか。

「来たくないのなら来なくなっただっていいさ。でも俺にとってはお前が必要だからさ」

「……………え？」

まあ、分かってくれないだろうけど。また新しいメンバーを探すしかないよな。美雪には悪いことしたなあ。

「じゃあな、葵」

俺は立ち上がって、公園を後にしようとする。

「……………待ちなさいよ！」

いきなり葵に袖をつかまれた。

「な、なんだよ？」

下を向いている葵。なんかもじもじしている。なんか印象が違う。

「別に明日から行ってあげてもいいけど……………」

「ほんとか！」

「勘違いしないでね！　私は美雪先輩に迷惑をかけたくないだけなんだから！　あんたがあたしを必要としてるとか、どうでもいいから……………帰る！　……………また明日」

足早で歩く葵。俺のことはどうでもいいのか。まあ美雪に迷惑をかけたくないと思ってくれてるなら嬉しいよ。

「また明日、か……………」

俺も帰ることにした。こっから自分の家は遠いけど。

第5話「佐藤真美と友美」

次の日、葵は来てくれた。

「良かったあ。来てくれて！」

美雪も喜んでくれてる。だけど、栞と夏奈子が来ていない。二日連続で休むとは少し予想はしていたが、現実になるとは。

「たつきゅーやろうよお」

真美と友美がそろえて俺に言ってくる。

「わかったよ。とりあえず素振りをやろう」

「はい！」

二人は元気よく返事をする。やる気があっていいな。

とりあえず最初はフォアで素振りをさせる。表で三角形を描くように振れと教えた。斜め上、下、腰辺りに動かす。……うーん。美雪と友美は結構上手いな。美雪は分かるけど、友美は結構才能があるかもな。基本ができてるからな。問題は残り二人だ。真美は適当に振ってるようにしか見えない。ちゃんとやれって言っても、初心者だから仕方ないか。次は葵だ。前傾姿勢をしていない。ラケットを真横に振る。ものすごく悪い見本だ。

「おい、葵。フォアはこうやって振ってくれ。腰辺りから、顔のところにへんまでいってくれ。斜め上に上げるんだ」

俺は手本を見せる。葵はまじまじみてる。

「わかったか？」

尋ねると、葵はなぜか我に返ったかのような顔をする。顔を赤くしてそっぽを向く。

「な、なによ！ わかってるわよ。ただちゃんと指導をしてくれるかどうか見てただけよ」

「おいおい……」

大丈夫なのだろうか、葵は。

「コーチイ！ こんな感じ？」

真美が呼ぶ。

「あ、ああ。さっきより良くなってるぞ！ 上手いじゃないか！」
葵よりすごいな。呑み込みが早い。真美も友美のようにすごくなるだろう。

「……………」

ん？ 友美はさっきまで良かったフォームが少し悪くなったな。

「友美。もうちょっと前傾姿勢に」

「……………」

なんか、不機嫌になってる気が……。なぜだろう。

「きゅ、休憩にしようか……………」

まだちよつとしかやってないけど、つい休憩にしまった。美雪もなんか不思議そうに俺を見てる。気にしないでくれ……………。

俺が記録をとっている時。

「真美のバカ！ もう、いつもいつも！」

突然友美が叫び、扉に向かって走っていく。

「お、おい友美！」

俺は呼びとめようとしたが、もう外に出ている。結構足が速いんだな。

「一体どうしたんだ？」

俺は真美に尋ねる。

「よく分かんない。コーチに褒められたって言ったたらなんか機嫌が悪くなって出て行っちゃった」

「そうか……………。三人は素振りをしていてくれ！」

「悠斗さんはどうするんですか？」

美雪が尋ねてきた。

「俺は友美を探してくる」

俺は踵を返して、友美を探すことにした。

すぐに見つけた。木の陰でしゃがみこんで泣いていた。

「友美……」

「うっ……うっ……」

返事は無かった。聞こえなかったのだろうか。俺は隣に座って友美の頭を撫でてあげた。友美はビクツとなって、こっちに顔を向けた。目が赤い。

「うっ……」

「何か嫌なことでもあったのか？」

「……」

答えてくれない。何か悔しかったのだろうか。そう言えば真美が。

コーチに褒められたって言ったたらなんか機嫌が悪くなって出て行っちゃった。

なるほどな。

「真美に褒めていたのを気にしてたんだな」

泣いてこっちを向きながら友美は頷いた。

「真美は……ひっく、いづも……友美の上に行くから……うっ

……」

そうか。双子で容姿もそっくりなのに、どうしていつも姉ばかり褒められ、上の方にいくのか気にしてたんだな。

「俺が悪かった。お前は初心者とは思えないくらい最初から上手かったから褒めたりするのを忘れてた。まだまだコーチとしては半人前だけど、これからは友美に対しても、経験者の美雪にも褒めていくようにするよ」

「友美が……うまい？」

友美は驚いているようだ。

「ああ。なかなかだった。でも俺が真美の方を先に褒めたせいでバ
ランスが悪くなったた」

「そ、そうだったんだ……真美より上だったんだ……」

圧倒してる感じの顔をしている。そりや今まで真美の方が上と思
ってたからな。驚いて当然だろう。

「友美は卓球の能力が他より秀でてたんだよ。俺は今日、友美を見
てて思ったんだ」

「友美が……うっ……」

あれ！？ 俺なんか悪いこと言ったかな……。泣かしてしまった。

「ご、ごめん」

「うっん……。嬉しくて泣いてるだけだから。ありがとう、コーチ」
目をこすりながら友美は言った。よかった、納得してくれて。

「これからもずっと友美を見てるから。もっと強くなるよう応援し
てるぞ！」

そう言っって俺は撫でてやった。すると突然、友美が俺に抱きつい
てきた。

「コーチは高校二年生だよな？」

「あ、ああ」

な、なんか恥ずかしいな。

「四つしか離れてないから、友美はコーチのこと先輩って呼んでい
い？」

「先輩でもいいさ。どう呼んでくれてもいいから」

「ありがとう、先輩！」

友美は顔をあげてニコニコしている。とても嬉しそうだ。

まだコーチになってから三日目なのに、ここまで仲良くなれたの
は進歩だな。このままみんなと絆を深めて、万全な状態で大会に挑
んでゆきたい。

「さあ、練習の続きやろうぜ！」

「はい！」

元気よく手を上げる友美。なんかいつも通りだなんて思ってしまった。

「今日の練習はここまでだ」

「はい、ありがとうございました」

四人からそういうお礼を言われる。顧問の人もお礼を言われるとこんな気持ちだったのかな。なんだかくすぐつたい気分だ。

「せんぱーい！ 一緒に帰りましょーよおー！」

「え？ うわっ！」

友美が俺の右腕に抱きついてきた。いきなりすぎて俺は動揺してしまった。わけがわからない。

「先輩は友美の婿なんです！」

そんな話聞いてないんですけど！ …… ってそう言うことじゃなくってだな……。

「友美の婿なら真美の婿だよ！」

次は真美が俺の左腕に抱きつく。

「ちよつと二人とも！ 悠斗から離れなさい！」

そうだ、葵。俺から二人を離して …… 葵は俺の後ろに回り込み抱き付いて俺を引つ張る。それでも助けようとしてくれるのか？

「ゆ、悠斗さんは、渡せません！」

美雪は止めるどころかなぜか張り合いだした。前方から俺の服をつかみ引つ張る。前後左右から引つ張られててすごく痛いんですけど……。

どづつしてこうなったんだ……。

第6話「田島夏奈子（前編）」

土日が過ぎて、二週目に入った。約一週間になったな。コーチになつて。だけどまだまだ女子卓球部がまとまっていな。……と思つていたら。

「二日も来なくてすみません」

「あ、あの……すみませんでした」

「あ、いや。気にしなくても大丈夫さ」

来てくれた。栞と夏奈子が。

「栞ちゃんたちやつと来たあ！」

真美と友美も喜んでいる。

「これでみんなもそろつたし、練習を始めよう！」

「おー！」

「おー！」

真美と友美が手をグーにしてあげる。

「おー！ ガンバルー！」

美雪も元気だ。やっと揃つたつて感じだもんな。

「……おー！」

栞はなんか元気そうじゃない気が……。

「お、おー」

夏奈子は相変わらずもじもじ系だな。かわいらしくていいけど。

今日は卓球台を二台出して、球出し練習をすることにした。とりあえず、ピンポン球をラケットに当てる。とりあえず慣れさせるんだ。

まず、二チームに分かれる。夏奈子と葵と真美のチームと、栞と友美のチームにしてみる。

「じゃあ三人の方は俺が付く。美雪は栞と友美の方に行つてくれ」

「はい！」

よし、俺と美雪は球出しをして、一年のみんなはミスでもいいからラケットでそれを返す。とりあえず最初はそんな感じだな。

「いくぞ！」

「は、はい……きゃっ！」

うーん……。夏奈子はちょっと怖がりすぎだな。尻もちついちゃったよ。

「ううう……」

「だいじょーぶ？ 夏奈子」

「うん」

真美が夏奈子の手を持ってやっている。この調子でどんどん仲良くなってくればな。

「栞ちゃん！」

え？ 栞？

美雪の声が出た方を向くと、栞が座り込んでいる。かなり汗をかいている。まだ全くと言ってもいいほど練習をしていないというのに。

「悠斗さん！ 私、栞ちゃんを保健室へ運びます！」

「あ、ああ」

というわけで、栞と美雪は抜けることになった。それにしても、栞は気分が悪かったのに無理して来てくれたのか。なんか悪いな……。

休憩。みんなは水筒にある飲み物をいっぱい飲む。

「ふいー！ 生き返るなあ！」

友美がそんな一言を漏らす。真美も飲み物を飲んでいる。葵はツインテールを揺らしながらタオルで汗を拭いている。こつちを見てきた。

「何あたしたちを観察してるのよ」

「別にそういうわけじゃないから！」

俺は観察とかしたりしねえから。ただ体調が悪くないか見ていただけ……それは観察とも言えてしまうか。

夏奈子は一人でしゃがみ込んでいる。話しかけてみるか。

「おーい、夏奈子」

「ふえっ！ い、いやあ！」

え？　なんか悲鳴を叫んでいます。驚いちゃったんですけど。

何にもしてないんですけど。冷たい視線を感じる。この感じ、多分葵だろう。真美友美は睨んでいないと信じておこう……。

美雪は帰ってきた。栞は休ませてあげてるらしい。まあ、体調が悪くないなら仕方ないな。

とりあえず、今日の部活は終了だ。

校門まで来ると、

「せんぱい！」

後ろから友美が来た。

「あれ？　真美は？」

「あとで来ますよお！」

「そうか」

やっぱり双子だから一緒に帰るんだな。そうだ、夏奈子について何か知っているのだろうか？

「そっぴや、夏奈子について何か知ってるか？」

「えー。友美以外の女の子の情報を教えるんですかあ？」

「ど、どういことだよ……」

なんかいじられているんだろうな。友美はすぐに悪戯っぽい笑みをした。

「なんでもないですよ！　夏奈子はクラスが同じになって、卓球部

「なったからお友達になれたとは思いますが！でも先輩には仲良くできないかも」

「なんでだよ？」

俺は怪訝そうに聞いてみた。

「夏奈子は、男嫌いなんですよ。だからこの学校に来たんだって！」

「お、男嫌いだって!？」

こゝこれは大変なことになってきたかもな……。

第7話「田島夏奈子（後編）」

俺は家に戻った。どうすれば男嫌いが治るか考えた。……何か方は無いだろうか。でも、無理に治そうとしてもダメだよな。迷惑だろうし……。

美雪に聞いてみた方がいいだろうか？ 同じ女の子だし。

と考えていたらいつの間にか金曜日になってしまった。栞は来ていない。まだ元気が戻っていないのだろう。夏奈子にも怖がられっぱなしだ。

「で、何か方法はないかな？」

美雪に聞いてみる。

「うーん……」

美雪は腕を組んで考え込む。頼む、何かいい案は無いのか？

「……明日は土曜日ですし、みんな遊びに行くってのはどうでしょう？ そうすればいいんじゃないですか？」

と言ってニコツと笑う。

「あ、遊びに行く、か……」

という流れで土曜日。女子卓球部＋俺で遊園地に来てしまった。

俺は保護者役になるのだろうか、この場合は。余計なことは考えないでおこう。

「遊園地だよ遊園地！ あれから乗ろうよ！」

「ち、ちよつと！ あたしはただ付いてきただけなんだから！ 楽しんでるかと思ってないんだから！」

友美が葵を引っ張ってアトラクションへ向かう。

栞は元気そうに友美についていく。

「早くいきましょー！ 悠斗さん！」

美雪が俺の手を引つ張つてきた。まさか、本当は美雪が楽しめたかったからこんな案を……なわけねえか。

友美と葵、栞がコーヒークップに乗る。俺と夏奈子と真美と美雪も違うカップに乗る。

「わー！ やるよ！ いくよ！」

「やめなさい友美……きゃあ！」

「は、速いよー！」

動き出した瞬間、友美たちが乗っているカップが高速回転を始めた。友美のやつ、かなり楽しんでるな……。

「次あれに乗りたーい！」

「乗ろうよ、乗ろう！」

友美と真美がみんなを連れていく。

俺と葵と夏奈子は休むことにした。ベンチに座る。もちろん、葵は真ん中で、両サイドに俺と夏奈子がいる。……それにしても、

「なあ、葵」

「なによ？」

「ちよつとだけ、近いんだが……」

「……！ べ、別に近くにいたいからつてわけじゃないから！ あなたがかなりの……め、面積をとってるからじゃないの!？」

なぜか怒られた。葵が顔を赤くしてる。そんなくらいにまで怒るのか……。じゃあ、ちよつと離れた方がいいのかな。

「えつと……。じゃあ葵と夏奈子の分のジュース買ってるから、ちよつと待ってて！」

「えー？ ちよつと……」

「どうした？」

「……なんでもない」

葵はよくわかんないなあ。まあいいか。まあ俺が離れたら葵も気が楽になってくれると思うからいいか。

戻って見たら、葵がいなくなっていた。夏奈子しかいない。葵は他の人とアトラクションに乗りに行ったのだろうか。じゃあこのコースは俺が飲むか。

「はい、これ」

「あ、ありがとうございます」

夏奈子はコースをおそるおそる受け取った。やっぱり怖いのだろう。ベンチに腰を下ろして、俺は夏奈子に言いたいことを伝えることにした。

「あ、あのさ……」

「は、ひゃい！」

いきなりでびっくりして嘔んじやってる。

「俺のこと、怖いよな。俺みたいな男の人に慣れてないんだよな？」

「すみません」

「いやいや。謝ることじゃないから」

誰にだって怖いことはあるさ。俺にだって色々あるから……。

「俺、これからも努力するよ。夏奈子が怖がらないように……。迷惑だったら、あまり近づかずに指導とかするけどさ」

「迷惑なんか……じゃないです」

え？ 夏奈子……。

「まだあまり練習したりしてないですけど、清水さんは優しいってもう分かっています。教え方も上手いし、すごいと思っています。だから慣れようとしています。でも体が怖がっちゃって……」

「そっか……」

夏奈子も自分では努力をしていたんだ……。俺がいるのを分かかって部活にも来ていたもんな。一週間、夏奈子は頑張っていたんだ。

「……ひゃっ」

俺が夏奈子の肩に手を置いたらびっくりしたようだ。そりゃ当り前か。

「進歩してるじゃないか。すごいな、夏奈子は。この前までは近づいただけで怖がっていたのに……。君はすごい子だよ。君はもっと成長できると思う。これからも俺と みんなと卓球を練習していこう！」

「……はい！」

初めて夏奈子が本気的笑顔を見せてくれた気がする。仲良くなれたのだろうか。

この後はみんなと合流して色々なアトラクションを楽しんだ。これで、女子卓球部みんなとの絆が深められたと思う。これで、大会に向けていっぱい練習できる！

みんなで、女子卓球部を存続させていこう。

第8話「石黒栞（悲劇）」

今日は最初に体育館の半面を5周からのスタートだ。みんな元気よく走っている。卓球だつて、他のスポーツと同じくらい体力はいるからな。ちゃんと体力つけるための運動をさせないと。

「はあ……はあ……」

一番辛そうなのが、夏奈子か。

「頑張れ夏奈子！ あと一周だ！」

五人走り終わり、その後夏奈子が走り終わる。

「頑張ったね！ かなちゃん！」

「う、うん！」

栞の言葉で夏奈子は嬉しそうにしている。やっぱりいいな、友情つてやつは。

「それじゃー、みんな！ 五分だけ休憩だ！」

「五分だけかあ。でも休憩だあ！」

「やつほーい！」

双子揃つて元気そうだ。

いや、みんな元気だ。美雪も、栞も、夏奈子も、葵も。なんか、やつと卓球部らしくなってきた感じがする。最初はばらばらだったけど、やつと揃うことができた！ 俺は猛烈に嬉しい。このまま団結力が深まっていけばいいと思う。そして、夏季大会で一勝以上の成果を収めることができれば、この女子卓球部も存続できる！
あと二カ月。勝つために頑張っていかないとな。

次はラリーの練習だ。それぞれラケットを持って二チームに分かれた。前と同じメンバーでやることにしたけれど……まあいいか。
「……ごめん、なさい」

え？ 栞？ 栞が荷物を持って外に出て行ってしまった。卓球台

のそばにはラケットが落ちている。

「どうしたんだ、いつたい……」

俺が美雪に尋ねるとただ首を横に振るだけだった。

「わかりません……なんか突然あんな感じになって……」

「そうか……」

栞。どうして放棄したんだ。

「……俺、栞を追いかけてく！ 今日の部活は美雪に任せていいか？」

「任せてください！」

「よし！ さんきゅ！」

俺は荷物を持って栞を追いかけることにした。カバンを持っていったから、体操服の姿でそのまま帰るつもりだろう。俺は一気に校門を目指して走る。

どこ行っただんだ。……バス停。あ！ いた！ 今バスに乗り込むつもりか！ 俺は栞と話さなきゃいけないのに、ここで逃がしたら負けだ！

……乗れたあ。

「な、なんで清水さんが……ここに？」

「栞を、追いかけてきた」

「どうして……ですか？」

栞は俺に怪訝そうに聞いてきた。そんなの決まっている。

「君がいないとダメだからだよ！」

「え、ええっ!？」

なんでそんなに驚いたんだ？ いや、そんなことはない。

「だから、どうして部活を途中で抜けたのか教えてほしい。俺はコーチだ。栞のこと、ちゃんと知っておかないといけない」

「わ……私の……?」

栞はうろたえている。でも聞かないといけないんだ。なぜなのか

を……。

「少し長くなるかもですけど、いいですか？」

「ああ……」

長くなる、か。今までのことも過去の出来事のせいなのだろうか。とても知りたい。

バスの一番後ろの席に二人で座り、栞の話に耳を傾けることにした。

「私、小学校くらいから卓球をやり始めてたんです」

「へえ、そうなのか」

栞はうなずいた。そして続ける。

「卓球が大好きで大好きでたまりませんでした。毎日毎日、ペンホルダーのラケットを握って練習していました。でも私は他の人とは違う気がしてきたんです」

「他の人とは、違う？」

俺は首をかしげる。栞の寂しげな表情を見て、俺はこれから話すことは辛いことなんだなと思った。

「あまり卓球経験のない友達と私は卓球をしてました。でも、友達と卓球をやる回数が減ってきたんです」

話すのが辛そうな顔してるのに、無理に話そうとして……。俺が我が儘を言ったのがいけないんだろうけど。

「友達は私を嫌うようになりました。私の卓球が強すぎる。女の子じゃないみたい。私ばかりにピン球を当ててくる。痛いからやめて。そんな声をいっぱい浴びせられて……。いじめまでに発展しました。学校に持って行っていたラケットも壊されたりと、散々でした」

それは、ひどいな……。

「だから、私はもつと普通の、ただの女の子を演じようと思いました。卓球をしないと決めていました。そして何年か過ぎて、卒業しました。私はいじめに耐えきって、みんなとは違う中学校に来ました。」

今の姫原女子中学校です。ここなら、大丈夫だろうと安心していました。友達も何人かできて私は幸せでした。嘘の自分を作り上げたから、できた友達です。もう、卓球やつてもこんな感じのままだろうと思っていたら……」

「二日目にあつた部活動開始の時か……？」

凶星だよな。体がビクツとなつてた。栞は泣きそうな目でうなずいた。

「まだ、ホントの自分が残っていて、嫌でした。闇の自分……またいじめが復活すると思って、怖いんです。ラケットもったら豹変なんて……さらにおかしくなっちゃって。私……どうしたら……」

「……」
栞も怖がっているんだ。背けているんだ。自分の好きなことから……。

第9話「石黒栞（覚醒）」

バスは信号で止まっている。栞の話は終わったようだ。栞は俺と同じだ。

「俺も小さい頃から卓球をやってたんだ。でも、いろいろあって…小四くらいで卓球辞めちゃった」

「そうなんですか……」

こっちに目を向けずうつむきっぱなしの栞。

「でも、中学の友達と卓球をしていて気付いたんだ。俺の卓球は他人のことで終わらせちゃいけないって。自分の好きなものは他人に何言われようが続けたって、悪いことじゃない。言われて、塞ぎこんでても、何も始まらないぞ。いじめはいけないことだ。栞は悪くない。でも、卓球が好きならやめることなんかない。やるかやらないかはお前が決めるんだ。他人じゃない！」

「……」

栞は涙を流す。

「それと、お前は自分で壁を作って恐れている。本当の自分に。逃げちゃだめだ。本当の自分と向き合わなくちゃ。本当の自分で勝負していくんだ！」

「でも……みんなに……嫌われ、る……」

まだ折れてる。分かってもらわないといけない！

「じゃあ聞こうじゃないか。俺と女子卓球部のみんなは栞の本当の性格を見ているぞ。でも、今までと同じように接しているだろ？ 違うか？」

「それは……」

困惑の表情をしている栞。

「遊園地の時はどうだ。みんな栞を引っ張りまわして楽しく遊んでたじゃないか。嫌ってるならほったらかしにしてるんじゃないか？」

「みんな……一回しか見てないから……」

「忘れてるって言うのか？　だが、俺は覚えているぞ。本当の栞の卓球を。あまり上手くは無かったが、楽しそうにやっていた。今の君は卓球になると、今みたいな悩んだ顔をしている。本当の栞は卓球がしたいんだ。恐れることなんか何もない。ただ、君は卓球部のみんなに力を貸せる。俺は確信している」

「……………」
栞は黙ったままだ。なら仕方ない。

「……………降ります！……………行くぞ、栞」

「……………え？」

バスから降りる。ちょうど市民体育館を通ったからだ。

「今から卓球をやるぞ」

誰も卓球をしていない。平日だからか。とりあえず台を出す。

「……………」
栞は黙ってネットの準備をしてくれた。

さつさと準備を終わらせて、俺はシューズを履く。栞もシューズを履いた。

「さあ、ラケットを握るんだ」

「……………」

「怖いのか？」

栞は小さくうなずく。まだわかってきてくれない。

「栞！　お前は……………卓球をやりたいからあの部活に入ったんだろう？」

「……………」

「……………早く卓球やるうぜ。……………俺がお前を嫌っていると思っているのか？」

「……………え？」

栞は顔をあげて反応する。

「俺は君が楽しく卓球をやっているとところを見たい。今なら誰もいな

いだろう。仮にもいじめてくるやつらはいない。俺は本当の君を嫌っていい。むしろ大好きだ。僕は、本当の君が大好きだ！」

栞は涙目になり、大粒の涙を流す。

「……ありがとう、うござい、まず……えっぐ……」

手でこしこしと涙を拭う栞はなんだかかわいらしい。打ち解けたみたいで良かった。

「わだし……他人に大好きって……うう……いわれたの……はじめで……」

俺は栞に近づき頭を撫でてやる。

「俺は女子卓球部のコーチだ。偏見なんて気持ちは持たない。みんな大好きさ。支えになる」

「ううう……」

「もつと心に余裕持つてさ！ さあ、卓球やるうぜ！ はやく栞の本当の卓球を見てみたい」

「は、はい……」

栞は涙で濡れた手でラケットを握る。

「じゃあ……いきますよ！」

「ああ、来い！」

もう目つきが違う。ものすごい集中力を感じさせられる。栞も美雪と一緒に。めちゃくちゃ強くなるはずだ！ そう思える。

きれいなサーブ、ツツッキ、ネットスレスレを越える下回転のピン球。すごい。この前とは全く違う。なんだろうこのわくわくさせられる感情は。シングルスで大会に出ているような感覚！ ずっとしていたような勝負！ 華麗なレシーブ。きれいにピン球をこするように放つ強力なドライブ。かっこいいと思える。美雪と実践練習で、一セット先取でもいいから試合をさせてみたい！

「栞……君はすごいよ！ 君が本当の自分に目覚めれたから見れた君の実力だ！ すっげえ興奮するよ！」

「あ、ありがとうございませす！」

コーチやれてよかったってすごく思える。なんだよここの卓球部。

可能性を秘めた子たちばかりじゃないか！ この卓球部の女子中学生はすげえ！ もしかしたら、夏季だけじゃなく、地区、県、全国までいけるんじゃないのか！？

これはすごく期待ができる！ わくわくが止まらないぜ！ 残り二カ月。卓球部の成長が楽しみだ！

翌日。

「昨日はすみませんでした！ 今日から頑張りますのでこれからもよろしく願います！」

ぺこりと頭を下げて丁寧に栞が挨拶した。

「おかえり！ 栞ちゃん！」

部長の美雪は温かく迎える。

「しおりん帰ってきたあ！ 早くやろうよお！」

「やろうやろう！」

友美と真美もいつも通りだ。

「栞ちゃん、一緒にやろう！」

「うん！」

一番仲がいいと思われる夏奈子も栞の手を引いて卓球台へ向かう。

「まあ、サイテーな人がいなければもつといい部活になりそうだな。どね」

なんか機嫌が悪いのだろうか、葵。絶対俺のことを言ってるよな。

これで、女子卓球部は本当に揃った。もうすぐ六月になる。そろそろ本格的に指導していかないと。この部活なら、やっていけるな。

第10話「謎の手紙」

ついに六月に入った。もう一週間したらコーチになって一カ月になるな。早いなあ。最近はみんな部活に出てくれて、しっかりと練習してくれる。俺はすごく嬉しい。

「あ！ 悠斗さん！」

体育館の扉を開こうとしたら、美雪がやってきた。今来たのか。

「今日もよろしくお願ひします！」

ぺこりと頭を下げる。

「あ、ああ。なんだよ、急に……」

なんだか照れくさい。

「嬉しいんです！ 悠斗さんとみんな卓球をやるのが」

「ははっ！ そうか。俺もさ！」

二人で笑いあっていたら、いきなり体育館の扉が開いた。赤い髪の子とツイントールの子がいる。栞と葵だ。

「なにしてんのよ。はやくやりますよ」

「ああ、そうだな」

待たせたからちよつと不機嫌なんだな、葵は。いつものことだけど。

「あの……悠斗さん」

栞が話しかけてきた。

「なんだい？」

「えつと……なんでも、ないです」

「え？」

栞もなんか不機嫌そうだ。すぐに中の方へ行ってしまった。俺、怒らせてたっけ？

「さあ、今日も五周から始めるぞ！」

「はい！」

友美が元気よく走り出す。みんなも続いて走る。今日もみんな元気だ。一番早いのはやっぱり美雪か。さすが先輩だな。いや、部長と言った方が部活らしく聞こえるかな。夏奈子が少しペースが遅くなってるな。ここは陸上部じゃないから、速さとかはいいんだけど。これは達成感と体力つけるための運動だ。最後まで走りぬいて、集中力などを少しずつ身につけてもらう。

そっぴや、男子卓球部は外周十周ばかりで、いつもへとへとだったな……。俺体力ないからめっちゃつかれてたな。中学生の頃が懐かしい。まだ高校二年の男子だけど、そう思う。圭一郎も頑張ってるってたな。あと、

「さん！ 悠斗さん！」

「……っあ！ ごめん！」

「何ポーっとしてんのよ」

葵に冷たく突っ込まれた。

「ごめん。色々考えてて」

「悩み事なら、いつでも相談してください！」

「え？ ……ああ、ありがと、彗」

「い、いえ……」

中学一年生に心配されてしまった。何考えていたかは黙っておこう。

「五周走ったか？」

俺が聞くとみんな元気よくうなずいた。

「コーチ、ずっとポーっとしてるから、みんな待ってたんだよ？」

真美がそう指摘してきた。

「そ、そうなのか……。すまん。じゃあ次はラリーをやってくれるか」

「はい！」

六人そろってるから、最近は卓球台を三台も出して練習している。毎日メンバーを変えさせて練習する。そうした方が練習になる。

今日は、美雪と真美のペア、夏奈子と葵のペア、栞と友美のペアですることにした。

いつも通りのメニュー　フォアとバックの素振りと、フットワークしながらの素振り。その後にフォアのラリー、バックのラリーをやる。その後休憩を入れて、次はツツキのフォアとバックの練習。その後はレシーブ練習などを入れてある。疲れるだろうけど、最低限のことは練習しないと、一カ月ちよつとにせまっている夏季大会にでる選手たちに対抗できないかもしれない。できるかぎり練習しないとな。

「さあ、休憩だ！」

「わーい休憩だあ！」

いつも通り双子さん方は喜んで水筒がある方に向かって走る。元気はまだあるならよろしい。さて、俺も立ちっぱなしだし、座って休憩するか。……ん？　カバンに紙が乗ってる。いつの間だろう。誰かのいたずらか？　暑いからって、体育館のドアを開けてたし、こつそり誰か入ってこんな紙を残したのだろう。折ってあるから俺は広げて見た……！

「な、なんだよ……これ……」

いたずらにしてはちよつとな……。殴り書きで『早くこの女子卓球部をやめなければ怪我をすることになるぞ』と書いてある。怪我？　そんなバカな。俺はそんなんでつられたりしないさ。

「何ですか、それは……」

美雪！？　わ！　おい、紙を勝手に取るなよ……。

「えつと……ええつ！　これは……きよ、脅迫状！？」

「おい！　声がでかいって……」

みんな寄ってきたじゃないか。

「こんなのいたずらに決まってるじゃない」

葵が冷静に言う。ああ、これは完璧ないたずらだ。

「P・Sって書いてありますよ……？　読みづらいですけど」

夏奈子が文の下の方を見て言った。書いてあったっけ？　よく見て

なかった。殴り書きだしな……　気付かなくてもおかしくないよな。

「なにになに……　『雨の日、ずっと待っているぞ』？　どういうこと

でしょう？」

雨の……　日？　何か引つかかる……。俺は何か……　忘れている？

「……ぐっ」

頭痛だ。なぜか急に頭が……。

「大丈夫ですか!？」

栞が近寄ってくる。みんなも心配そうに俺の周りに集まる。……

治まってきた。

「……　大丈夫だ。部活、続きやろっぜ」

「でも……」

不安そうな顔をする美雪。

「大丈夫大丈夫。ちよつと頭痛になっただけだつて。さあ準備しろ

ー！」

「は、はい」

みんな乗り気じゃなくなっちゃったな。悪いな……。俺、どうし

たんだろっか。何か忘れてることがあったか？

……　まあいいか。みんなはツツキ練習に入ってる。調子悪いな

ら、倒れるわけにはいかないな。この子たちに、一勝でもいいから、

夏季大会を勝たせてあげないと……。

第11話「休部処分」

俺の高校の卓球部が休部処分を受けてしまった。原因は先輩が他校と喧嘩してしまい、大会の出場停止及び部活停止処分という、残念なことになってしまった。2学期までは部活動はやれないらしい。非常に悔しい。

「残念だったなあ」

圭一郎が嘆く。

「ホントに残念だよ。大会は楽しみだったのに……」

「そうだな。なんで喧嘩とか乱暴なことしたんだろうなあ」

「さあな……」

俺は靴を履いて門に向かう。

「それじゃあまたな、圭一郎」

「お、おい……」

「なんだ？」

圭一郎に呼び止められた。早く姫原女子中学の部活動へ向かわないといけないってのに。

「お前っていつもどこ行くこうとしてんだ？」

「え！？ えっと……」

言えない。女子たちに 中学生に卓球を教えることなんか。

どうごまかそうか……。

「ちょ、ちょっと自主トレ……かな」

「かなって、お前なあ」

圭一郎は呆れたように俺に言ってきた。まあ、俺だってそう言うだろうけど。圭一郎の立場から見たらな。

「そ、そういうわけじゃあな！」

「お、おい……」

こんなところでずっと捕まっていたら埒があかない。走って門まで行く　が、門のところでは何者かに腕を掴まれ、動きを止められた。「誰だ!？」……って、梨香か」

梨香が俺の腕に抱きついてきてる。なんだよ、急いでるときに……。

「いつもどこに行くのよ?」

めっちゃ怪しまれてる。

「ど、どこだっついていいだろ! それじゃあな!」

行こうとしたら、次は足をひっかけられた。不覚にもこけた。

「痛ってーな!」

「いいなさい! どこに行くのよ!」

なんか相当怒ってる。どうするか……。

「……お、おい! あれを見るよ!」

「ふえ?」

指差した方向を梨香は見た。今だ!

「あ! しまった!」

高校生で引つかかるやつもいるんだな。引っかけられてこけた俺が言えることじゃないけどさ。

「休部しちゃったんですか!??」

「ああ」

部活終了後、たまたま美雪と一緒に帰ってる俺は休部処分を受けたことを話した。

「部活……停止ですか……」

美雪はうつむく。この女子卓球部は休部程度じゃすまないもんな。廃部。阻止するために俺たちは頑張ってる。

「廃部はさせないぞ!」

「え?」

見透かされたのかというような顔をした美雪は啞然としている。

「大丈夫さ。みんな強くなってきたから。このペースでいけば
廃部になつたりしないから。プレッシャーを感じなくていい！」

そう言ったら美雪は少し微笑んでくれた。

「ありがとうございます。私、頑張りたいです」

「ああ、応援してる」

「は、はい」

美雪が顔を赤くしている。照れてるところ初めて見た気がする。

「あ、あの……」

「ん？」

「手、っ、繋いでもいいですか？ 途中まで！」

「いいけど、どうして？」

「え、えっと……元気をもらうためです！」

「そっか。じゃあ、はい」

俺は美雪の左手を握ってあげた。柔らかい感覚がある。

「ありがとうございます……」

「お、おう」

なんか、照れくさくなってきた。美雪もうつむいて顔を合わせようとしないうし……。まあいつか。

夕日が地平線へと隠れていく。俺と美雪はその地平線へと向かい歩いてゆく。

休部しちゃったけど、美雪たちの部活は行くことができる。六人みんな強くなれる。絶対に。夏季大会は絶対に負けられない。

第12話「ランニング！」

土曜日。なんにもすることがないから走るとするか。ランニング用のシューズを履いて俺は外に出る。いい天気だ。でもまだ少し暗いな。当たり前だ。今は早朝の六時だ。六月だが少し肌寒い。

今日は家からスタートして、少し離れた公園まで行って、そこから往復して来るか。だいたい二十kmくらいは走れていると思う。

七時過ぎに帰って来ることは……難しいな。まあコンビニでなんか買つか。最近買ったTシャツを着て準備運動をして……。……十分にやれたな、じゃあ行くか。

結構走った気がするが……。そろそろ七kmは走れたくらいだろうか。けっこう疲れるな……。ちょっと休憩するか。そこにあるベンチに腰をかけよう。……。あれ？ そのこのベンチに見覚えがある子が真美だ！ こちら辺に住んでるのかな？ ていうか、汗だくじゃないか！

「真美！」

「ん？ あれ！ コーチ！」

真美は驚いたような顔をしている。俺も驚いてるけどな。

「どうしてここに？ その格好は、ランニングでもしてたのか？」

「そだよ！ 体力を上げるために最近土曜日に走ってるようにしてるんだ！」

「そうなのか」

感心するなあ。偉い。あれ？ そういや、友美の姿がない……。

「友美は一緒に走っていないのか？」

「友美？ あー、まだ寝てるよー」

友美らしいな。友美ってマイペースみたいな感じだしな。真美もだけど。もうすぐ七時だから起きてくるくらいか？ 私生活は知ら

ないけど。じゃあ一人つてわけか。それなら……。

「一緒に走るか？」

「え？ いいの？」

「ああ、さあ行くうぜ！」

「うん！」

まだ元気っぽいな。真美の体は汗で濡れているようだ。真美の黄色の服は汗でかなり染みているのが分かる。首にかけているピンクのタオルで真美は自分の顔と首周りを拭う。それと、服の中にまでタオルを入れて汗を拭っている。……って俺が目の中にいるってのに！……まじまじ見ていたら……いけないよな。いきなりすぎて目線がそこにいつて……。

「……別にコーチに見られてても良かったけどね」

「え、ええっ！」

見てしまったのがバレてる。いや、俺の目線を見たらそりゃ分かるか。嫌な風に見られてしまったかな……。

「じょーだんだよ！ 本気にした？」

「い、いや、ちよつと驚いただけさ」

ウソです。ちよつと信じました。

「さあ、走ろっ！」

真美はいきなりダッシュを始めた。

「ま、待てよ！」

真美のやつ。結構速いな。一緒に走るのは初めてだ。いつも体育館で走っている所を見て、速い方とは知ってたけど、なかなか速い……。負けてられないな。

「すごいな、真美！」

「へへっ！ 小学校の時は、マラソン大会は学年で一位だったんだ！」

マジかよ！ そっぴや、友美がこの前言ってたな。真美は色々できるとか。そりゃそっぴやという結果出されたら、気にしちゃうよな。

双子なのに実力の差が違っってことが。

「さあ、置いて、きやつ！」

真美から女の子らしい声が聞こえたかと思っただら、さっきまで見ていた真美の姿が視界の下の方へいく。ばたつと真美は倒れた。つまり、置いてこえちまったのか。

「大丈夫か!？」

「痛ったーい！」

真美はしゃがみこんで足を押えてる。怪我をしたのか。涙目になつてる。右膝を怪我してるようだ。血が出ている。あれ、右腕もすりむいてるじゃないか。

「とりあえず……傷口を水で洗おう」

「う、うん」

かわいいな。涙目でうなずく女の子は……。って何思ってたんだ俺は！ そんなことじゃない！ お、ちよつどいいところに公園が。この前葵と逃げてきたところじゃないか、ここ。ここら辺まで走つて来たのか、俺。

とりあえず公園に入り、水道で真美の膝と腕についた土を洗い流す。

「痛い……」

「我慢我慢」

よし、泥は落とせた。次は消毒してやるか。怪我をした時用に俺はランニング中には消毒用の薬を持ってきている。そんな機会はいままでなかったけどな。

真美をベンチに座らせて、膝を出してもらつ。消毒液を傷口に付ける。

「うう……」

「ちよつと染みるだろうけど、我慢な」

「うん」

付けてあげた後、たれてきた部分をハンカチで拭いてやる。次は腕に付けて同じようなことをする。その後、包帯を巻いてやった。

「ありがとう」

「気にするなつて！ 今日には家に帰った方がいいぞ。無理はいけな
いからな」

「分かった！ コーチが用意周到で助かったよー！」

「はは、このウエストバッグは色々入るからな。結構気に入ってる
んだ」

俺は自分の緑色のウエストバッグをポンとたたく。

「あはは！ コーチっておもしろいね！」

「え？ そ、そうかな」

朝日に照らされた真美の笑顔はとても美しく見えた。なんかドキ
ドキしてしまった。

「……おぶつてごうか？ 歩き辛いだろ？」

「でもー、真美は重いよ？」

「いいよいいよ、気にすんなつて！ 俺は結構力あるからさ！」

「おー！ 頼もしいー！」

真美が胸の前で手を組む。俺はしゃがんで真美に乗るようと促
した。おぶつてみたけれど、軽いじゃないか。このまま真美に案内
してもらいながら家に向かおう。

こうして家の前まで真美を送って行った。……いつの間にか八時
過ぎてしまっている。腹減ったなあ……。

第13話「純粹」

今日は雨だ。梅雨の時期だからなあ。でも卓球は体育館でするから、雨なんて些事なことだ。でも蒸し暑いや。湿度が一気に上がるからな。六月は。晴れてくると次は外までじめじめした感じの暑さになるから、それは嫌だな。他の事からみたら些事程度じゃないな。「体育館あつーい……雨降ってるのにい」「あつーい……」

弱音を吐いてるのはもちろん真美と友美だ。この二人がこんなこと言うのはなんか慣れてきたな。

「暑い……」

あれ、夏奈子も言ってるよ。とかあ思いながらも俺もここに来たら暑いなどは思わなかった訳じゃない。でもそれを乗り越えて練習すれば成長をするんだ、みんな！……という余計なことも言える元気がない。でもこの子たちのために弱ってる姿を見せるわけにはいかない。

「上手くツツツけないじゃない」

「うーん……ちょっと横に動かし過ぎだよ。ボールの下の方をこするように斜め下にラケットをおろすんだ」

「わ、わかつてるわよ」

葵は俺の話の聞いてツツツキの練習をする。ツツツキはピン球の回転を下回転に変える方法だ。これが上手くできないと大会では不利になるだろう。誰でも下回転のサーブスを使ってきたりする。たまに横回転をかけるやつもいるが、そうはいないだろう。それにたった一カ月程度でそんな細かく教えてたら大変だ。やっぱり基本を徹底しないとまず勝てないだろう。しっかりと基本の練習をさせて、その後に実践練習をさせる。大会のルールがすぐにわかるように体

で身につけてもらわないとな。サービスの仕方とかな……。

「うーん。むずかしー！」

「むずいー！」

真美と友美はダブルスの練習もしてもらっている。二人は双子だからと勝手に単純な考えだが、意気が合いそうな二人ならやれると信じてる。

「みんなお疲れ！ 十分間休憩しようか」

みんな疲れ顔だし、休ませてあげないと。それに暑いし。長時間やらせっぱなしは体に悪い。

「せんぱーい！ 友美のラケット見てー！」

「ん？」

友美が近寄ってきて、自分のシェークハンドラケットを見せてきた。

「ラバーを買ったってことか？」

「そだよ！ ラバーは色々種類があって迷ったんだよねえ。粒々があるラバーとかそれがないラバーとか。よく見るとなんかラバーによってスマッシュが強くなったり、回転がすごくなったりとか、回転の効果を受けないとか書いてあってさー。それみて選んできたんだ！」

ほう、自分で選んだのか。自分の金で買ったのかな？ ラバーって結構高いのにな。しかもシェークハンドは表裏にラバーを貼るからその分高いし。

「これは……裏ソフトってことは回転をかけやすくするやつか。確かこのラバーは、回転かかりやすくしてドライブとかも打ちやすいから、初心者にもお勧めのラバーだな」

「へー！ よくわかったね！ そだよ！ そうやって書いてあった！」

俺の方が背が高いために上目使いで見ていた友美は無邪気に喜んでいる。そして友美は踵を返して、

「それじゃあ休憩しまーす！」

と言って、自分のカバンがある方へかけていく。

「栞ちゃんには関係ないでしょ」

「……」

あれ？ 喧嘩？

「……なら勝負してください。私が勝ったら、あきらめてください」

「……分かったわ。私が勝ったらもう文句なんて言ってこないでね」「分かりました」

喧嘩しているのは、栞と、美雪だった。一体何があったんだ？こっちにくるんですけど。なんか真剣な表情してる。美雪はこっちをちらっと見た。ちょっぴり顔が赤く見えたような……。なんか話しかけづらい。

美雪と栞が卓球台の前へ行く。このピリピリした感じはなんなんだろうか。怖いんですけど。

四人が俺の横に来た。

「お、おいこれは一体何なんだ？」

「さあ……」

葵はすごく不機嫌そうだ。なんだ？ みんなで喧嘩でもしたのか？

いや、葵はいつもこんな感じか。

「恋の戦いです……」

夏奈子が静かにそうつぶやいた。恋の戦いって……。まさか美雪と栞は好きな男子が一緒に、栞がなんか言って美雪が怒ったのか！？と、止めづらい。ここは見守っているほうが正しいのだろうか。……悩む。

「先に二セット取った方が勝ちだからね。栞ちゃんはもう知ってると思うけど、一セットは十一点を先に取った方が獲得できるわ。サーブスは二回づつ。互いに十点取ったらデュースになって、先に二点差つけたほうが一セットを取れるわ。いいわね？」

「はい！」

元気よく返事をした栞は構える。
最初のサービスは、栞からだ

第14話「美雪vs栞」

やっぱり、美雪の方が強い。栞はミスしてばかりだ。美雪の下回転サーブに栞は上手く返せずネットの当たったり、変な方向へ飛んでいたりする。ラリーも続かない。栞の打ったピン球がチャンスボールと分かると、美雪はすぐにスマッシュやドライブを放って確実に点を入れていく。

栞のあの悔しそうな顔。負けたくないと思っているのだろう。少し焦っているようにも見える。ツツキサーブもネットにかかり、ミスをして美雪に点を与えてしまう。この調子だと美雪が勝っちゃうな。

この試合は二セット先取。先に二回勝った方が勝ちだ。今はどちらも一セットも取っていないが、点数的に言うとな一セットを取れるとしたら美雪だ。美雪が八、栞が二・六点差もつけられている。栞は確かに強いが、ここで逆転できるほどの実力を持っているのかはまた微妙なところだ。美雪がサーブミスやスマッシュをミスれば勝ちへと通じる道ができていくかもしれない。

「……負けたくない」

そうやって小さな声で栞がつぶやいたような気がする。さあ、先輩が相手なんだぞ？ 栞はどうする。今から美雪がサーブだぞ。サーブ権は二回ずつだ。お前がミスしたらもう後がなくなるぞ。それか栞がツツキで美雪の下回転を返して点を稼ぐ。それが美雪がサーブミスをする運だめしでいくかだ。

美雪がピン球を上へ上げる。そしてピン球が落ちてくるところできれいにピン球の下をこする。ピン球は下回転をしながらバウンドをして、コート中央にある青いネットすれすれを越えて、栞の方のセンターラインより左の方にボールが着く。

「……！」

栞はすぐに自分のシェークハンドラケットのバック側でツツキ

をした。今度は上手くいくか!? 栞が放ったボールはネットをかすめて美雪のコートにギリギリ入る。

「うわっ!」

美雪は思わず声を出した。美雪は打とうとしたが間に合わず。ネットをかすめて、その付近にピン球が落ちたら確かに取ることは難しい。

「やった!」

栞も小声で思わず言ってしまったのかな。でも嬉しい一点だろう。今までの二点は美雪がスマッシュをミスして入った一点だ。

「……取り返す」

美雪はピン球を取って、サーブの構えをする。ピン球を高く上げて、それからのツツキを放った。ネットを越える。だがピン球はコートに入らず、エッジ。台のふちの方も越えて、床に落ちた。美雪はミスをした。

栞は二点も獲得することができた。喜びに満ち溢れた笑顔。最高だ。だけど、喜んでいる場合じゃないぞ。栞。お前は今四点差もつけられている。

この後、美雪はミスしたり栞に点を取られて、デュースにしまった。同点の十点になって、勝敗はどちらか……わからないな。だけどこの流れでいくと……。

栞はサーブをする。普通の上回転のサーブだ。しかし、スピードが速く取りづらそうだ。やはり。美雪は空振りをしてしまう。そして。

いい勝負だったと思う。栞は最初のセットは取ることはできたが、次のセットは美雪に取られてしまった。栞は涙目だった。でもまだあと一セットあるぞ。最後のセットは、美雪が十点、栞が八点とけっこういいところまでいった。

栞がサーブ権だ。栞は下回転のサーブを打つ。美雪はそれをカツ

トする。そこでチャンスが生まれた。美雪がカットしたピン球は高く上がった。チャンスボール！ 栞は綺麗な曲線を描いてピン球を打った。強力なドライブが美雪のコートのセンターラインに来た。だが美雪はそれをドライブで返して。

結果は美雪の勝ちだ。ホントにいい勝負だった。

栞は泣いて外に飛び出してしまった。夏奈子が追いかけて行ってくれた。俺も行くとしたが止められた。うーん……。恋ってよくわからないものだ。卓球で勝敗を決めるものなのだろうか。

「あの……」

美雪が俺に話しかけてきた。

「勝手なことをして、部活を乱してしまつてごめんなさい！」

美雪は深々と頭を下げて俺に謝罪してきた。なんかこっちも悪いなつて気持ちになつてきた。

「別にいいよ。一応あれも実践練習になつただろうし」

「ホントに、ごめんなさい」

すごく反省してるみたいだな。俺は事情とかよくわからないから謝られても困るだけなんだけど。

とりあえず部活は終了した。栞も謝りにきて、また困った空気になつてしまった。

恋かあ……。

二人は誰に恋をしたのだろうか。泣くほどに、対決したいほどに愛してしまった人が。この学校で好きになつた人でもできたのか……！

「お、おい栞……」

俺はつい尋ねてしまった。動揺してしまつて……。

「はい……？」

「まあ、恋愛は自由だろうけど、女子と女子で……いや、女子校の中ではあまりそういうこと話したりとかは……その……」

「え、ええええっ！」

相当驚かれた。そりゃ知られたら驚くよな。

「わ、私は女の子好きじゃありませんっ！ちゃんと男の人が好きですよ！」

手を横に振って栞は俺が思っていたことを顔を真っ赤にして否定した。

「そ、そうか。……悪かった」

違うのか。女子校には男子いないからてっきり……。

「えっと……。卓球で負けたくらいで恋をあきらめちゃいけないぜ」

「え？」

「負けたって、恋に負けたわけじゃないだろ。だから、あきらめるなよ」

「清水さん……」

し、栞が泣きそつだ。俺、おかしいこと言ったかな？

「清水さん……この前、美雪先輩と……」

「美雪と？」

俺と美雪が何かしたっけ？

「……手、繋いでましたよね……」

「俺と美雪が？」

そうだったっけ……。あ！ そういやこの前……。栞は見てたのか。

「あれは……気にしないでいいさ！……ん？ でもなんでそんな話題に？」

「い、いえ……」

栞は首を横に振った。その後俺の方をじっと見つめる。

「清水さんは、好きな人はいるんですか？」

「え？」

突然の質問に、俺は唾然とした。俺の……好きな人？

「いないけど？」

「そうですか……」

硬かった栞の表情が緩んだ。俺のを聞いてどうするんだ？

「よし、もう下校時刻だぞ！」

「あ、はい！ それじゃあさよなら！ 悠斗さん！」

「ああ」

栞に初めて名前で呼ばれた。今の会話で少し打ち解けることができたのだろうか。……俺も帰るか。なんか疲れた。

第15話「咲花梨香（疑心）」

今日の授業が終わった。部活は休部中だし、帰るしかないんだよなあ。まあ、美雪たちに早く卓球を教えられるし、別にいいか。

俺は靴をげた箱から取り出して履く。ちよつと靴紐がほどけそうだけど、家でやればいいか。

「悠斗ー！」

俺が門に向かってしていると梨香が後ろから手を振りながら俺に近寄ってくる。

「どうした？」

「今からそのー……」

いきなりもじもじし始めた。今近寄って来た元気は一瞬にしてどこかへ消え去った。

「なんだよ？」

「今からいつもの体育館で、卓球しない？
突然の誘い。」

「なんで？」

「ひ、暇だからに決まってるでしょ！ 期末考査終わったし！
すごい怖い顔で睨んできた。確かに、俺も暇だな。」

「あ、ああ。いいよ」

「それじゃあ行きましょー！」
ころころ変わるなあ、梨香は。梨香が門付近へ行くと何かに気づいたようだ。

「あれって姫原の制服……？」

「姫原？ こっから離れてるのにどうして……。まさか……。」

「あ！ 先輩いたよー！」

「ホントだー！」

「な、なんで6人全員がここに……！」

「ちよつ、ちよつと！ どうしてここに？」

「来ちゃ悪いわけ？」

葵は変わらず不機嫌ですね。……じゃなくて！

「悠斗？」

後ろから不思議そうな顔をした梨香が話しかけてきた。これはとてもまずい状況じゃないか？

「あの、勝手に来ちゃってすみません」

美雪が丁寧に謝る。

「い、いいけどさ……えっと」

「……」

梨香はたた唾然としてる。ホントにこれは予想をしていなかった事態だ。とりあえず、

「ご、ごめん梨香！ 俺、用事で来たから行くわ！」

「えー！？ ちよっと！」

とりあえず逃げよう。

あ！ ちよどいいタイミングでバスが停車してる。

「み、みんなとりあえずあのバスに！」

「え？ あ、はい！」

卓球部メンバーもあわてている。俺もだ。運悪く梨香に見られてしまった。もし女子校の卓球部で教えてることがばれたら……。圭一郎にも知られてしまうだろう。

美雪たちをバスに乗せた。俺も勢いで乗ることになった。行先は今はどうでもいい！ たまたまこのバスには乗客がいないようだった。俺は安堵の息を漏らす。

「いきなりどうしたんですか？」

夏奈子が怪訝そうに聞いてきた。それはこっちが言いたい言葉だ。なんだが。

「お前らもどうしてここに？」

「なんでって、先輩が練習に来なかったからだよう」

友美が困ったような顔でそう言った。

「練習今から行くつもりだったんだけど……」

「もう終わったわよ！」

そっぽを向きながら葵は怒りを込めたような感じで言った。

「え！？ でもまだ……」

「今日は期末テストで早く終わったんです」

そっか。中学校はもうそんな時期か……。もう六月下旬だしな。

「だから部活動時間が早くて、終わりも早くてまともに練習をしていないわけか……。ごめんな。高校は期末のテストはもう先週の内に終わってて、今日はもう通常授業だから長引いちゃってさ」

「気にしなくても大丈夫ですよ！」

葵は明るい声で笑顔をみせる。とても輝かしい笑顔だ。

「ホント悪かった」

今日はどうしようか。練習を無しにしちゃうか？ でも、大事な

夏季大会が迫って来ているしな。

「今から練習したいか？」

「今からですか？」

「ああ」

俺はうなづいて見せ、近くに練習できる市の体育館があると説明した。

みんなは了承してくれた。

バスの中で色々話が聞けた。あらかじめ俺にテストについてのことは話してたらしい。悪い、忘れてた。ついいつもどおりに行動していた。あと、俺も伝えておけばよかった。

それで俺が全く来ないから、バスで頑張つて俺のいる高校へと来たみたいだ。ホント悪かったよ。無駄足させてさ……。お詫びに今日は違うとこだけと練習をいっぱいさせてあげることにした。

「六台しかないねー、卓球台」

壁側によせてある卓球台をみて真美はそうつぶやいた。出しっぱなしは邪魔だからな。壁側になれば邪魔にならないし、台がいつぱいあってもこの部屋には入りきらないだろう。

「三台あれば大丈夫だろ。さあ、準備して！」

「はい！」

六人は台を準備するために動き出した。そういや、彼女たちは制服だ。……出てた方がいいよな、俺。

「ネット準備しよ！」

「うん！」

栞と夏奈子が折りたたまれていた卓球台を広げ、床に置いてあったネットが入っているポロボロの箱を開ける。葵たちも楽しそうに準備をする。

最初の時、こんな風楽しくやっていけるとは思わなかったな。みんな俺を見て嫌がったりして、部活に来てる人も一気に減ったな……。

栞、葵、真美、友美、夏奈子。そして、俺をコーチとして選んでくれた、美雪。美雪のおかげでこんな出会いができたんだ。感謝しないとな。こういう思い出はもう二度となさそうだから。一日一日大事に過ごしていかなないと。女子卓球部を存続させるためにも。コーチになったからには……。

……ん？ 待てよ。今まで疑問に思わなかったけど……。いまさら過ぎるけど、どうして美雪は俺をこの女子卓球部のコーチにしたんだ？ しかも出会ってからすぐに。ただ俺はあの時、男子たちに絡まれていた美雪を助けただけだ。初対面の人にコーチになってくれといきなり頼むなんてちょっとおかしい気がする。初対面の人を誘って卓球した俺もおかしいけど。学校側はどうして俺の出入りをオーケーしてくれているんだ？ ……なんで今になってこんなことを思ったんだらう。

「……さん。……斗さん」

どうしてだらうか……？

「……悠斗さん！」

「え？ わ、わあ！」

気づいたら美雪が俺の傍まで迫っていた。びっくりした。

「悪い。なんでもない。さあ練習だ！」

「……悠斗」

え？ 後ろから聞き覚えのある声で呼ばれる。振り向くとそこには。

「梨……香……」

梨香と、連れてきたのか判らないけど、圭一郎も一緒だった。追いかけてきたのか？

「説明、してよ。………どういつ事？」

この状況は、終わったな………。

第16話「咲花梨香（絆）」

「黙ってないで……話さない」

とても悔しそうな顔をして静かに言う。色々な感情を抑え込もうとしているのだろうか。

「悠斗。もうここは話さないとだめなところじゃね？」

圭一郎がやれやれといったげな顔をして苦笑している。

「……判った。話すよ」

俺は二人に五月くらいから姫原女子の中等部の卓球部にコーチとして指南していること、卓球部のことを話した。

「……その、美雪ちゃんって言うの？ 美雪ちゃんはどうして悠斗を誘ったの？」

梨香が美雪に視線を送る。

「え……？」

「変なグループから悠斗が助けってくれたのは判ったわよ。その後卓球をして実力が判ったのも。でもどうして男子の悠斗をコーチにしたわけ？ この体育館には女子の人も来る時があるわ。……何か裏でもあるのかしら？」

梨香が疑いの目を向けて冷たく言い放つ。美雪はうるたえてしまっている。俺もそこは疑問だったけど……でも、

「梨香！ そこまで責めなくてもいいだろ！ どんな理由があつたって、俺はこの子たちに卓球を教えていくつもりだ！ 部活動を失くしたりさせない」

「でも……悠斗は無理をしてるんじゃないの？ 姫原は高校から遠いのよ？ そこから部活動時間に間に合うように急いでいくなんて……。中学生の子くらいにはもう『迷惑』って言葉が判るはずだよー！」

「……」

美雪……。俺は……。

「俺は迷惑なんて思っちゃいない。俺は毎日全力でこの子たちに卓球を教えていた!」

「本気で言ってるの?」

「当たり前だ!」

「それなら……」

梨香が俺たちを横切り卓球台の方へと歩く。

「悠斗がそこまで言うのならあなたたちは強いよね?」

「何よさつきから偉そうに。悠斗さんと美雪先輩を責めて……」

葵が小さな声でそうつぶやいた。

「悠斗コーチは……本当に一生懸命教えてくれたのに」

夏奈子が悲しげな声で言う。

「先輩は……友美たちを元気づけてくれたんだよ!」

友美が主張する。

「真美が怪我した時にも優しくしてくれたんだよ!」

続いて真美も、

「悠斗さんをやめさせようとしているんですよね? ……私は、悠斗さんと過ごせて良かったと思ってる。美雪先輩とも……。おかしいと思われたって、悠斗さんは女子卓球部のコーチなの! 二人を責めるなんて、私が許さない」

栞……。

「みんな……」

美雪が涙目になりながらみんなのほうを見ている。

「だとよ、梨香」

圭一郎が割り込んで会話に入ってきた。

「これだけ想われてるんだ。悠斗は本気でこの卓球部の子たちに熱心に教えてたんだ。そんな向きになることないんじゃないか?」

「……だめよ」

梨香が振り絞るような声で言った。

「……だめ。だめだめだめだめ! 女子の中に、なんで悠斗をいれなきゃなんないのよ!」

足で思いつきり床を踏みしめている。

「悠斗は渡さないわよ……。卓球で勝負をつけましょ」

「卓球……?」

「そうよ。……三セット先取のミックスダブルスでやりましょ。私と圭一郎が相手になるわ」

「え！ オレもかよ！」

圭一郎が驚く。

「私たちに勝てたら、悠斗はあなたたちのものよ。もし私たちが勝つたら、悠斗は……。私のものなんだから！」

「ちよつとそれは表現的に……」

「う、うるさいわね！」

圭一郎の突っ込みになぜか梨香が怒った。……でもこれは、梨香を認めさせるチャンスだな。なかなかおもしろいこと考えるじゃないか。

「よつし！ ダブルスなら友美たちがやるよ！」

あれっ？ 友美と真美がなんかやる気満々になってる。

「まで二人とも!？」

「大丈夫だよ！ 真美たちにまかせて！」

「そ、そういうことじゃなくて……。ミックスダブルスは男女混合ダブルスのことで、男と組まなければならぬんだぞ」

「え、そなの？」

中学の大会じゃ普通は男子と女子とわかれてやるからと思って話してなかったな。

「ということは……悠斗さんと組む人を選ぶんですね」

夏奈子はすぐ理解してくれた。

「そういうことだ。……美雪。ダブルスはできるか？」

「そこまで上手くはないですけど、大丈夫だと思います。悠斗さんがいるから」

「そっか！ それじゃあ頑張ろうな」

「はい！」

みんなは俺のことを想ってくれてる。勝たないとみんなの気持ちを裏切ってしまう。負けたらどれほど辛いものか……。いや、負けることなんかない。美雪とダブルスを組んだことないけど、やるしかないんだ。

「美雪」

「はい？」

準備を始めた美雪は首をかしげた。

「信じてるから。美雪のこと」

「は、はい！ 私も信じてます！」

さあ、女子卓球部の運命がかかっているんだ。勝負だ、梨香。圭一郎。

第17話「咲花梨香（対決）」

サーブ権はこっちにある。シングルスとは違いダブルスは右側の方からサーブをして、相手のコートの方へといれないといけないというルールがあるから面倒だ。相手は高校生二人組だ。一回のミスで命取りになる可能性もけっこうある。だから、失敗はしないようにしたい。

俺がツッツキのサーブを出す。普通の下回転。レシーブ役は梨香だ。梨香はカットするが、ミスしてネットにかけた。こっちの得点だ！

「……まだまだ始まったばかりよ」

俺はもう一度下回転を出すことにしてみた。返された。それはもう当然と思ってなきやいけない。頼む美雪。美雪もツッツキで返した。でも圭一郎はそんなにうまくはない。カットマンだからな。すぐカットして返してきた。……俺とすることが、ミスしてしまったけど、これだけで負けは決まったわけじゃない。

二回のサーブを終えたら、その二人は場所をチェンジしないといけない。俺がレシーバーにならず、美雪がレシーバーになる。ダブルスはそうやって進んでいくもの。まあ、知らないことはないだろうけど、美雪と相手二人はな。

着々と試合が進んでいく。流れは俺らの方が圧勝中だ。かなりのプレッシャーを感じてるのか、梨香は調子が悪いようだ。

「な、なんで……」

相当焦ってんな。この調子なら勝てるけどな……もう二セットも取ったから、余裕だな。さあ、終わらせるぜ。残り4点を取ればもうゲームセットだ。

美雪がサーブをする。圭一郎がすぐに返す。でも俺はもう負けな

い。攻撃プレーをするはずの梨香は不調だ。強気でいく。俺の放ったドライブが相手のコートに入る。梨香は返してきたが、ネットに阻まれてまた失点。

「本気でやってるのか、梨香……？」

「……うるさいうるさい」

涙目になりながら静かにそう言う梨香。相当悔しい気持ちなんだな。でも、手を抜いてられない。俺は美雪たちに安心して部活をやってもらいたいから。勝つんだ。

「梨香」

「何よ」

突然、圭一郎が真剣な顔で梨香に向き直る。

「まだ終わってないからな」

「判ってるわよ！」

落ち着かせようとしてるのか……。

「判ってるのなら、もっと落ち着いてプレーをしろ。判ったか？」

「……」

梨香は沈黙した。何も言わずに、ただ俺たちの方を見ている。そ

して、深呼吸をして、

「……よし」

気合い入れたみたいだな。こっからが本当の戦いになるのか。

「美雪、しっかりやれよ。あいつら強いから。特に梨香の方は注意しろよ。あいつのドライブはめっちゃスピードがあるから」

「判りました……」

美雪はまだ笑顔だ。勝つということしかもうないからか。……俺だっけ負けてられないな。

強い。

あつという間にデュースにされてしまった。こっちも頑張ったんだけど……梨香のレシーブがなかなかのもので、失点を許してし

まった。めんぼくないな。

「どうかしら？　これが私と圭一郎の実力よ」

一気に前向きになったな……。

「まだ終わってませんよ、梨香さん」

美雪も燃えている。

「これはどっちが勝つだろうな」

他人事のように言ってるし、圭一郎。

「いきますー！」

美雪のサーブ。梨香がループドライブで一気に決めようとする。

美雪のサーブは甘かったのか。それでも俺は……。ドライブで返す。だけど、ミスつちまった。圭一郎にピン球が当たって、そのまま床に落ちた。

「チャンスね……！」

くそ！

「……悠斗さん」

ここまでやってきたのに　負けてたまるか！　俺はカットした。

……しまった！　浮き過ぎだ。これはアウトか……？

ピン球は、サイドをかすめた。よっし！

「どうする、梨香？」

「うるさいうるさい！　勝ってやるわよ！」

こんなところでこんな熱い感じの試合ができるなんて思わなかった。しかもミックスダブルスで。

「もう二点だ！　集中！」

「はい！」

俺はこれで最後と思って、サーブを決める。

「やったあ！」

みんなが俺の周りに駆け寄る。

勝ったんだ。俺と美雪は。相手に一セットも取らせずに勝利した。

美雪にはなかなか実践練習になつたに違いない。

「さすがだな、悠斗」

圭一郎は落ち込んだ様子もなくいつも通りの平然とした顔で話してきた。

「これで、お前はコーチとしてやっていけるんだ」

「ああ」

無理やりやめさせることはこれで無くなった。良かった。美雪も安心したような顔をしている。

「……」

梨香は悔しそうな顔をしているが何も言わない。

「かえろーぜ、梨香。オレは疲れたぜ」

帰る支度をし始める圭一郎。あれ、梨香は全く反応してないけど。

「先輩はこれで友美たちをずっと教えてくれるんだね！」

「うん！」

「まあ、あたしはどっちでも良かったけどね」

「葵ちゃん照れ隠しー？」

「ち、ちがつ……！」

あつちはあつちで盛り上がった。

「……決めた」

梨香が何かつぶやいて俺の目の前に来た。

「決めた。私もコーチするわ」

「え……！」

いきなりの宣言。懲りてないんだな。

「男子を女子校に一人で行くなんておかしいわ。私もついてくからよろしく」

「お、お前も女だろ……」

と突っ込み入れても考えを変えてくれないのはもう判ってる。

「梨香、うち増えるならみんなもつと強くなれるね！」

「うん！」

真美……。なんか勝手にニツクネームつけて迎え入れようとして

るし。夏奈子まで……。

「これが昨日の敵は今日の友って言うんですね！」

栞、だいたいあってるけどきれいにまとめて終わらせないでくれ。圭一郎は参加する気がないかのようにもっていないし……。

「よ、よろしくお願いします……。」

美雪はなんか苦手意識を持ってっぽいな。……俺と同じだ、美雪。

明日から面倒なことになりそうだな。

第18話「この旗を掲げて……」

さあ部活動が始まった。

やっぱり梨香は来てくれました。美雪は緊張してる。もちろん俺もなぜかな。

「さあ、いつもの練習風景を見せてもらおうわ」
腕組みをして、怪しげに見つめてくる梨香。別に俺は悪いことな
んかしてないってのに。

「じゃあみんな。まずは五周走って!」

「はいっ!」

みんなそろって返事をして走り始めた。

「最初に体力をつけるために運動をするわけね」

「あ、ああ……」

やけに緊張するんだが。

六人は一生懸命走っている。俺と梨香はそれをみる。ちなみに圭一郎は来ない。二人で行ってこいよ、と言いつつ残し帰って行った。

来て欲しかった。梨香が来るなら……。

「何ため息ついてんのよ」

あ! ついしてしまった!

「なんでもないよ!」

さらに怪しむ目。やべえ……。

「終わりました! 悠斗さん!」

息を切らしながら美雪たちが来る。

「あ、えっと……」

梨香が気になっちまう……。

「悠斗さん?」

美雪は俺がおかしいことに気付いたのか首をかしげてる

「えっと……。あ、素振り! 台についてフットワークしながらフ
オアとバツクをしてくれ!」

「わかりました！」

美雪は元気よく返事して台へと向かう。……ん？ 葵がなんかこ
つちみてたような。また睨んでたのか？ あー、葵と梨香って性格
似てるかも。

「こんな練習してて間に合うの？」

「え？」

梨香が美雪たちの練習を見てつぶやいた。

「もう三十日もないでしょ？ 大丈夫？」

「さあな……」

「はあ！？」

梨香に驚かれた。判るわけないじゃないか。

「美雪と栞以外は初心者なんだ。それなのにのみこみが早くて、た
った数カ月でかなり成長してきた。今よりさらに腕を上げれば大会
で勝てるはず。だがもう少ししかない。だから、あの子たちしだい
なんだ。あの子たちの気持ちしだいで勝敗は変わるはず」

「そんなものの？」

「そうやって俺は信じてるけどな……」

「そっか」

それからずっと梨香は黙って美雪たちの練習を黙ってみていた。

よし！ 休憩はそろそろ終わりでいいかな。

「みんな集合してくれ」

みんなはすぐに俺の前に駆けつけてくれた。

「さあ、早く実践練習やっちゃおうー！」

「やるやるー！」

真美と友美がわくわくしてる。めっちゃ目がキラキラしてる。

「早くやりましょう！」

栞もか。ラケット持ったら卓球好きって事が判りやすくなるな、
ホント。でも、それが栞のいいところだよな。でもとりあえず落ち

着いてほしい。

「とりあえず落ち着いてくれないかな……?」

「梨香つちも練習手伝ってくれるよね!」

友美の不意に振る攻撃。

「え、えっ!? えっと、ええ……」

いきなりの振りに一瞬うろたえた。そりゃそうだよな。笑いそうになったが我慢しよう。

「えっと……練習はもうちょっとあとなんだ……。今からやってもらいことあるんだ」

「なんですか?」

夏奈子が不思議そうな顔をする。

「えっとな……」

とりあえず準備しなきゃな……。

俺は大量の新聞紙を体育館の床に広げ、その何十枚もの画用紙をくつつけて広げ、そこに大きな長方形型の布を敷く。

「何よこれ?」

葵が怪訝そうに聞いてきた。

「この布にみんなは目標を書いてほしいんだ。画用紙はガタガタにならないようにってことで、新聞紙は床が汚れないようにするためだよ」

「なんかカツコイイです!」

栞が目を輝かせた。

「俺が絵具を持ってきた。これで書いてくれ。布は大丈夫だ。これは分厚いし染みてくる心配とかしなくていい。ここに決意を書いて旗にするんだ。それで大会に臨もう」

「すごいことするわね……」

梨香が感心している。

「さあ、書こうぜ! 梨香も書いてくれよ!」

「わ、判ったわよ」

俺が筆を差し出すとしぶしぶ受け取った。卓球部のみんなにも筆を渡す。人数持ってきておいたんだ。梨香も来ると考えてな。

「なーにかこーかなー」

真美が指を柔らかくそんな自分の唇にあてて考えている。

「こつやつて字で書くときになると簡単に思いつきませんね」

栞が困った顔をしている。それは同意だな。実を言うと俺もちやんと考えてないぜ！ とは言えない。

「手形もつけてみませんか？」

美雪が案を出してきた。

「いいな、それ！ 名前の横とかに手形をつけよう！」

「オレンジもらったー！」

友美が筆にオレンジ色をつけて寝転がり旗に目標を書き始めた。

「真美とダブルス頑張るぞー！ by 友美って感じかなあ」

つぶやきながら書いて、名前に横に手形をつけた。

「私は赤！」

栞は赤を選んで目標を書き始めた。みんなで勝とう！ ……か。

栞らしいぜ。

「えつと……私は……水色！」

夏奈子はそう言っつて色を選び、栞に続いて目標を書く。精一杯がんばります。……はは。頑張れよ、夏奈子。応援してる。

「次あたし。藍色で書くわ」

筆に藍色をつけて葵は書き始めた。団体戦、みんなでがんばろうね！ ……女の子らしく書いたな、葵。女の子だけどな。

「真美は緑ー！」

元気よく旗に緑色の文字を書き始めた真美。絶対絶対絶対、勝とう！ ダブルス頑張る！ 元気がいいな、真美は。

「私は……ピンクー！」

美雪はピンクを選んだ。……みんな！ コーチたちとともに勝ち続けよう！ 部長らしい美雪。さすがだ。俺たちとともにか。かっ

こいいぜ。

「次は私でいい？」

梨香が俺に尋ねる。俺はうなずいてみせる。……部活を存続させるためにみんな最後まで全力だ！ おお。まともなこと書いている。

「じゃあ次は俺だなわああ！」

いきなり葵に藍色の手形を筆を持った方の腕につけられた。しかも両手でギョツとつけてきた！ いたずらっぽい笑みだ。

「ここで不意打ち攻撃か、葵……」

「ふふん！ あんたはいじられ役でしょ！」

「おやおや、性格が鬼畜なよう……。みなさんもね……」。

七人 梨香も一緒に俺の顔や腕に手形をぺたぺた付けまくってきたのであった。

「大変な目にあつた……」

洗面所で顔や腕についた絵具を洗い流した。ちょっと跡があるけど、仕方ないな。

「タオルどうぞ……」

美雪がやつてきた。ピンクのタオルを差し出した。そういや用意するの忘れた。

「ありがとう」

「い、いえ」

もじもじしながら美雪は返事をした。そういやこのタオル、俺のじゃない。

「これってもしかして……」

「あ、はい……私のです。気にしないでください！ どうぞ……」

もう使っちゃったから……。気にするのは美雪の方じゃ……。

「あ、ありがとな。洗って返そうか？」

「大丈夫です。私、そういうの気にしませんから！」

あせって返事された。まあ、気にしてないのならいいか。

今は実践練習中なのに。美雪は休憩のついでに来てくれたのだから。

「さあ、休憩したら実践練習の続きをやるんだぞ」

「あ、あの……」

「なんだ？」

美雪の表情が何か不安げだ。

「悠斗さん、目標は『これからもずっとみんなと進んでいく！』ですよね？」

「そうだけど？」

「変だったか？」

「実は……悠斗さんに話していなかったことがあるんです……」

「……？」

唐突にそんなこと言われても……何だろうか？

「梨香さんがこのまえ色々言っただけ、私はちゃんと伝えなければいけないなと思いました。だから言います」

「なんだろっ、このドキドキする感覚。聞いていた方がいいような、聞かない方がいいような。そんな思いが交じる。」

美雪……？

第19話「告白とズルイ心」

突然雨が降り出した。これから悲しいことが起きると察したかのようじ。

美雪ちゃんは どうして悠斗を誘ったの？

でも どうして男子の悠斗をコーチにしたわけ？

何か裏でもあるのかしら？

梨香の言葉がよみがえる。美雪はそれを気にして……。

「黙っていてすみません。実は……コーチの仕事……夏季大会が終わったらもう……」

「できないってことか……」

「はい」

なるほど……。色々と事情があるんだな。それを梨香に追及されて心が揺らいで、今回の事を打ち明けたのか。

「……ってことは、美雪たちと過ごすのはもう二十日とちょっとか。そうか……やっぱりずっと一緒にはやっていけないのか……」

「……ごめんなさい」

深々と頭を下げる美雪。

「あ、いや。気にしなくてもいいさ。そうなら、夏季大会までもっと頑張らないといけないな」

「……」

美雪は何も言わずうつむいている。別に罪悪感なんか感じなくていいのに。ここは女子校なんだし、先生にそう言われたんだろうから。普通は男子は入っちゃいけないんだ。特別に許可が降りたのは奇跡としか言えない。

沈黙が続く。体育館で響くピン球の音。フットワークの音。みんなの声。外の雨。その音しか聞こえない。

「練習。行こうぜ」

「え、あの……」

「期間ぎりぎりまで精一杯頑張るから。気にすんな」

「……はい」

後悔しているのだろうか？ ……いきなり言われて俺は確かに動揺したけど、ずっと一緒にいられると思ってる方がおかしいのかもしれない。

「今日の部活は終わりだ」

『ありがとうございます！』

みんな元気よく挨拶をする。美雪は空元気に挨拶しているようにしか見えない。さっきの練習のときも身が入ってない感じだった。

「……」

みんな準備している。みんな傘とか持ってきたのかな。雨はまだ降ってるし。

「……」

さっきから横目で梨香がこっちを見てくるんだけど。

「なんだよ」

「まあ練習内容はいい方だと思うけど、大会はどうなるか判んないわね」

「ああ……」

大会。それが終わったら俺はもうこの体育館へ来ることはもうなくなる。ここに来ることは俺の日常になっていたのに。来ないと思うと虚しさを感じる。

「私、先に帰るわ。じゃあね」

梨香は小さく手を振って出入り口の方へと向かって行った。

「悠斗さん、今日もお疲れ様です」

ちよつとドタバタした感じで栞がこつちに来た。

「栞もお疲れ。気をつけて帰るんだぞ」

「はい！」

満面の笑み。この雨の中で美しく輝く太陽のようだ。夏奈子を呼んで、栞は梨香が出て行った出入り口の方へと向かう。

「じゃあねー、先輩！」

「ああ」

友美と真美が大きく手を振りながら帰っていく。

みんなに教えてないのだろうか。大会が終わったら俺がいなくなる。知ってたら目標を書いているときに気づくか。それが美雪みたいに無理に笑顔を振るまって……。

「さよなら、悠斗さん」

「お、ああ。じゃあな」

美雪はさびしげな笑顔を見せながら小さく手を振って帰っていく。

「……」

葵？ なんにも言わずに行っただけ。表情がなんか暗かった。練習が上手くいってないのだろうか。結構上手くなってる気がするんだけどな。

黒色の傘をさして、俺は門へと向かう。もう生徒たちは帰ったか、まだ校舎内なのか良くわからないけど、ここは誰もいない。その方がいいんだけどさ。通りやすくて。

あれ？ 門に誰か立ってる。傘もささないで。びしょ濡れじゃないか？

「……お前」

長い黒い髪の二つ結びの少女 葵が両手にカバンを持って、うつむいてる。

「どうしたんだ？ 濡れてるじゃないか」

「当たり前でしょ。雨が降ってるんだから」

震えるような小さな声で喋る。俺は静かに葵の上に傘を持っていてやる。

「な、何よ」

下を向きっぱなしの葵。元気がない。

「迎えが来ないのか？　なら俺の傘に入ってるよ。風邪ひいちゃうぜ」

「……ほつといてよ。今は、雨にぬれたい気分なの……」

どんな気分だよ。それじゃあ風邪ひくって。

「だめだ。女の子を雨降りの中で一人で立ちっぱなしにさせておけない」

「ほつといてって言うてるでしょ！」

泣きそうな声で俺に向かって叫ぶ。そうして走り去ってしまう。

どうしたんだよ、葵。でも一人ぼっちにさせておけない。俺は追いかけることにした。

いない。

市街地に来たけど、傘をさしている人がいっぱいどこにいいのか見当もつかない。ファーストフード店か？　本屋か？　コンビニ？　それとも駅？　全く判んない。この前は商店街で適当に入ってたっばいし。

違う道を通って帰ってったのかな。とりあえず探すしかない。…

…あれ？

駅の近くの木にある円形のベンチに、傘もささずに座っている制服姿の少女がいる。

葵。

俺はすぐに近くによって、傘をもう一度葵の上にやる。葵はびくつきとして俺の方を向いた。雨でびしょぬれで服が透けてる。泣いてるのは雨で判らないが目が赤い。

「そんなに濡れてたら風邪ひくって言うてるだろ」

葵は泣きそうな顔になるが、見られたくないからかそっぽを向いた。

「バカ……どうして追って来たのよ」

「心配だからに決まってるだろ」

「いつも……相手にしてくれないくせに」

「え？」

相手にしてくれない。葵の本音だろうか。

「……なんでもない」

聞こえてないと思ったのか言葉をさえぎるようにそう呟いた。

「ごめんな」

「なんで謝んのよ」

こっちに顔を向けてくれない。

「俺、葵の相手、上手く出来てなかったんだな。悪いな。コミュニケーション下手くそだから、俺って」

そう言ったら葵はすぐこっちを向いて顔を赤らめる。

「ひ、独り言聞いてたとか、サイテー」

「わ、悪かった」

ふてくされたような顔してるけど、元気は戻ってきてるっぽいな。

「あ、見つけましたあ」

「？」

突然、道路の方から声が聞こえた。高級そうな黒い車だ。そこから茶色の髪の毛のロングヘアのメイド服を着た女性が顔を出す。

「葵様！ 学校へ伺いましたが、見つからなくて探しましたよ」

「あ、葵様！？」

俺は驚いて声を出してしまった。

「何よ」

「葵って、お嬢様だったの？」

「悪い？」

なんと、道が長い。大きい門を通つたら、かなりの距離があつた。そして、白い大きな屋敷が奥にそびえたつていた。

「すげえ」

「これは別荘よ。本当の家はもつと大きいわ」

「まじかよ」

俺たちの住む町に大金持ちだろうと思わざるを得ない屋敷はあると知つてたけど、まさか葵の住んでいる所だつたとは。しかも別荘ときた。小高い山を切り開いた感じのところきれいに整備された庭に道。アニメとかでよく見そうな感じだ。現実ではフランスとかにありそうな屋敷だ。海にも通じていて、夏はこの別荘で海水浴もできるとか、メイドの真有さんまありがそう言つてた。ちなみに真有さんはたちは二十歳前だそうぞ。

「どうぞ、お入りください」

真有さんが大きなドアを開ける。中はめっちゃ広い。レッドカーペットが敷いてある。なんて羨ましい。

「とりあえず葵様も悠斗様も着替えたほうがよさそうですね。お召しものを持ってきますので。待合室へどうぞ」

真有さんが大きな階段の方へと促す。二階へと上がり、大きな廊下を歩く。とても長い。六個めくらいの部屋かな？ そのドアを開けて入れてくれた。広い。個室なのに。それでも冷房がかかつていて涼しい。

「あたし、シャワー浴びてくるから。そのソファアに座つていいわよ」

カバンを机に置いて、葵は部屋を出る。

いつも通りの葵だな。あんな感じが葵っばい。

着替えて、しばらく待つていたら、真有さんが入つて来た。軽く会釈をして、

「お待たせして申し訳ありませんでした。お食事の用意ができまし

たのでござぞ」

「しょ、食事！？ いいんですか？」

「お気になさらないでください。葵様もお待ちになられています。こちらへ」

つ、付いていくしかないよな。

シャンデリアが二つもある……。長いテーブル。一度こつこつとここで食べてみたかった。さすが、庶民とは全く違うな。

「さあ、席におつきになってください」

椅子を引いてくれる。メイドって優しいな。

葵の斜めの席についた。

葵は青色の肩だしのドレスを着ている。胸には白い造花がつけられている。なんか、色っぽい。いつもと感じが違う。

「何じろじろ見てんのよ」

顔を少し赤らめて睨みつけてきた。

「悪い。なんかいつもと違って色っぽい感じでかわいいなって思っ
て」

「っ！」

なんか一気に顔が真っ赤になってる。

「べ、別に嬉しくないから……なにくどいちゃってんのよ」

「そういうわけじゃないけど……」

「召し上がってかまいませんけど」

「す、すみません。いただきます」

真有さんの指摘で俺は目のまえにあるステーキをナイフで切って、フォークで口へと運ぶ。

葵も食べ始める。

「お！ おいしいです」

「おほめの言葉、ありがとうございます」

真有さんは頭を深々と下げた。

「そついや、葵の両親は？」

「……」

葵は無視して黙々と料理を食べる。

「……葵様のご両親は」

真有さんが口を開いた。

「お仕事で海外に出かけられております。なので代わりにわたくしが葵様のお世話係を担当致しております」

「そんなんですか」

寂しいんじゃないのか、葵のやつ。

「悠斗様。今日はもう遅いのでここへご宿泊することをお勧めいたしますが」

「あ、でも俺大丈夫ですけど……」

「……明日土曜日だから泊ったら？」

葵が喋った。

「……葵がそう言うのならお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「ではご自宅の電話番号をお教えてください。わたくしがご連絡させていただきます」

「そんな、自分の携帯があるから大丈夫ですよ」

「ご苦労はかけたくないので、わたくしが代わりにご連絡させていただきます」

「はい」

なんか、すごいな、真有さん。

親に連絡してもらって、俺は風呂に入る。風呂もでかいんだけど、
と思いながらはいつて、大きなベッドがある部屋に通されたので、
俺は今日そこで寝る。

なんか色々なことがありすぎだ、今日は。

部活のコーチに梨香が参入したこと。美雪からの突然の告白。葵
をまた追いかけて。今度は葵がお嬢様だと知った。なんか展開がす

「ごいよ。混乱してきそうだ。」

眠い。疲れた。

いつもと違うベッドだけれど、寝心地がなんだかい。さすが高級ベッドだ。ふかふかだ。すぐに眠れそう。時刻は二十二時四十分。いつもより就寝時間がちょっと早いけど、寝る。おやすみ。

さよなら、悠斗さん。

ホントにさよならになる……のか……。

「んん……。何か、乗ってる？」

「……」

暗いし、寝ぼけてて……！ あ、葵！？ なんて姿……！ 下着姿じゃないか。ドレスはどうしたんだ。って寝る時までドレスなわけじゃないか。……つかそんなこと考えてる場合じゃない。これってよく言われてる……よ、夜這いってやつか？ いやいや、葵はそんなやましいことなんかしないだろう。中一だぞ。

「……やっとなきたの？」

静かに葵は呟いた。いるものツインテールではなく、最初のころのようにロングのストレートだ。

「やっとなつて、ずっといたのか……？」

「悪いの？ 十分くらい前にはいたわよ」

その格好でずっといたのか。

「で、どうしたんだ。まだ夜中だろ？」

「……」

葵は黙ってしまった。数分後にやっとな喋り始めた。

「あたし……ズルイことするから、いまから」

「え？ ……！」

葵は俺に顔を近づけ、唇と俺の口に重ねた。とても温かく柔らか

い感触が伝わってきた。なんて言えばいいか……唐突過ぎて……。

葵は顔を赤らめて口を離す。

「ズルイでしょ、あたし。勝手に人の気持ちを考えずにキスをするなんて。初めてでよくわからなくて怖かったけど……ごめんなさい」

「え、えっと……」

どう反応すれば……。

「あたしだって、清水さんのこと……好きになっちゃったんだから……。あ、あんたのせいよ。あんたがあたしに優しく接してきたから……。男の人はずっとサイテーな人間だと思っ込んで、関わろうとはしなかったけど、清水さんは違くて、みんなに優しくして、卓球上手くて、一生懸命過ぎて……惚れちゃったじゃないの……」

葵……。

「ホントズルイよね、あたし。美雪先輩や栞ちゃんもいるっていうのに……自分の気持ちにまかせちゃって……いつもドキドキして、性格をきつくしっちゃって……」

葵……。

「嫌われるようなことしかしてない……あたしの方がサイテーで」

「そんなこと、ない」

「……あるわよ」

「……ないよ!」

俺はつい衝動的に葵を抱きしめてしまった。

「あたし……親とかいつも傍にいないから、寂しくて……好きになつた清水さんにいつも傍にいてほしくて……相手してほしくて。」

でも、周りにたくさん人がいて、あたしと違って」

「そんなことない」

もしかしたら、葵は聞いてたのかもしれない。今日の俺と美雪の会話。だから一番寂しくなって、今日は俺をここに泊めて……。

「明日、二人きりで出かけるか。土曜日だしな」

「え……?」

「ちゃんと信頼してもらいたいしな。傍にいてやるって」
「……………」

葵の頬に大きな一粒の涙が流れ落ちた。泣いてる。葵が。

「バ、バカ……………信頼してるわよ……………。してなかったら、部活なんて行かないわよ……………」

「そうだな。……………いつも無理してたんだな。悪かった。明日はずっと傍にいてやるさ。デートってやつかな」

「で、デート……………?」

「ああ」

「あたし……………ズルイことしたのに、いいの?」

ズルイ……………か。

「気にすんなって。一日中ずっと相手してやるから」

「ありがとう……………。うう……………」

涙がこみ上げてきてる。こんなに泣いてる葵は初めて見た。これが本来の彼女なんだ。いつも寂しくて、心の中で泣いていたんだ。

「今日はもう寝ようぜ。ここで寝るか?」

「……………」

返事せずに布団の中に入って来た。まあいいか。今日は寝よう。

約束したしな。

「おやすみ、葵」

「……………おやすみ」

いつの間にか晴れていて、夜空にはたくさんの星が輝いていて綺麗だった。

第19話「告白とズルイ心」(後書き)

大特訓篇は完結です。

次回の新章も読んでください！

第20話「初デート 最後のデート」(前書き)

今回の章は女子卓球部のメンバーをメインに物語が進みます。

第20話「初デート 最後のデート」

デートしようと言われて次の日。

あたし、森川葵は屋敷の中のドレスルームにいる。ここにはあたし用のドレスがいっぱいある部屋。……ど、どれ着ていいのかな。

「葵様」

「！ な、なに！」

いきなりメイドの真有が部屋に侵入してきた。びっくりした。

「葵様のデート用のお召しものをご用意いたしました」

「な、なんであたしがデートへ」

「わたくしはあなたのお世話係。すべてお見通しでございます」

くっ……なんていつもあたしの隠しごととか見通せるのよ。昨日だって、何も言っていないのに学校から駅の方へそのまま車で来たらしいし。真有ってホントにいったい何者なのよ。

「ただのメイドでございますが？」

「！ なんであたしの心を読むのよ！」

「お世話係だからでござ」

「それだけだったらこの家の親も子供の心をすぐ読めちゃったりするわよ！ 好きな子がいるとかすぐばれちゃうじゃない！」

真有ってホントに十九歳？ あたしのメイドになってからそろそろ二年がたつ頃だけど、一体今までどんな生活してきたの！ ……つてつっこみを考えてる場合じゃないわ。

「そうですよ。これがお召しものです。白のワンピースでございます。葵様の好きなヒラヒラのスカートでございます」

「ヒラヒラって……」

よ、良くわかってるじゃない。

「これで悠斗様の心をつかめるはずでございます」

「何言い出すのよ……」

恥ずかしい。

「それと、悠斗様はツイントールがお好きそうなので、髪に赤いリボン付きのシユシユを選ばせてもらいました」

「ツイント好きってどこの情報よ」

まさか……心を読んできたとか……？

「そのようなことはしておりません。とりあえず着替えてくださいませ」

「はい……」

か、かわいいとか言ってくれるのかな……。

入口に清水さんを待たせちゃってる。お気に入りのサンダルを履いて、あたしは扉を開けた。

「お待たせ……」

「ああ。……お！ なんかいつもと違ってオシャレだな」

清水さんが笑顔を見せてきた。自分のほつぺたが熱くなるのを感じる。

「いつもオシャレじゃなくて悪かったわね……」

あたしのバカ……。素直に喜ぼうとしてもつい。

「えっと……じゃあ行くごうか。街に出かけるけどいい？」

「え、ええ」

電車に乗って三十分。大きな街についた。ビルがいっぱいです。いい。

「どこ行くごうか」

「えっと……」

「じつじつところあまりなれてない……。べっしよじよじよ。」

「……あ」

「え……？」

清水さんがあたしの手の方を見る。……！ あ、あたしいつの

間にか手をつないで……！

「ごごめん！」

清水さんはすぐにあたしの手を離れた。あたしが怒るとか思ったのかな。性格悪いもんね、あたしって。

「……つないでも良かったけど」

「あ、そう……」

意外そうな顔をされた。す、素直になるんだから、あたしだって！
そしてまた清水さんは手をつないでくれた。

「あり、がと……」

うう……。頭の中がぼーっとして訳がわからなくなってる。

「えーっと……百貨店に入ろうか」

「……ええ」

清水さんは手を引いて、あたしをお店の中に連れて行ってくれた。

「ここ入るの初めてなんだよな、俺」

「あたしも」

ありがと。あたしなんかのために初めて入るお店に連れてってくれて……。

「お、クレープ屋があるぞ。食べるか？」

「クレープ？」

話には聞いたことあるけど、食べたことない。おいしいのかな？

「クレープ、一緒に食べようぜ」

「うん」

清水さんはクレープ屋の前まで連れて行ってくれた。お店の前にはクレープのレプリカが並んでる。イチゴとクリームが入ったクレープ。バニラアイスのも、バナナが入ってるのもある。へえ、プリンとかあるんだ。……え！ 野菜とかソーセイジ入れるクレープも……。デザートじゃなくて、普通のお昼ごはんに食べたりするやつもあるのね。知らなかった。

「どれにする？」

「その……チーズケーキが入ったのがいい」

「わかった」

買ってくれるんだ。ホントに優しいな、清水さん。

「はいこれ」

「ありがとうございます」

一口食べてみた。甘くておいしい。クリームもいっぱい。

「おいしい？」

「うん！」

こんなに笑いあえたの初めてね。いつもあたしが逃げてばかりだったから。

「他はどこに行こうか。服屋とか行く？」

「ええ」

清水さんは手を引いてあたしを連れていく。エスカレーターに乗って上の階を目指した。

「エスカレーターって初めて？」

「乗ったことくらいあるわよ！」

「ははっ。だよな」

つい叫んじやった。

「ええ……」

なんでいつもこうなんだろう、あたし。

「どうした？」

「え、ううん」

これから変わっていけばいいのよね。うん。

その後色々回って楽しんだ。結構うまくいってる感じだとあたしは思った。

帰り。

「今日は楽しかった。ありがとな」

「こっちこそ……良かったわ」

終わるのが早い。とても。クレープ食べて、服を見たり。アクセ

サリーもいっぱい。

「夕日がきれいだな」

目の前にはオレンジに輝く夕日がとてもきれいに見えた。

「……あの」

「ん？」

もう一回言わなきゃ。大好きな人との初デートにして最後のデート。明日からはもう普通の卓球部のコーチになっちゃう。まだ返事をもらえてない。でももう結果はわかっている。あたしのことを恋愛的に好きにはなってもらえてない。そう思うと、やっぱり……。

「葵？」

「……」

あたし、別に泣きたくないのに。

「ホントに、楽しかったから……」

「葵……」

今日はいい思い出になった。

「あたし。あきらめませんから」

そう。今日の思い出のような楽しい日々が来るのを。

「卓球も頑張ります。みんなのために」

「ああ。応援してるぜ」

「清水さんの心も……取って見せます」

「はは……。なんて言えばいいかな」

照れ隠しか頭を掻いている。

「好きですから」

「そっか」

あたしはずっと清水さんが好き。だって、あたしの傍にいてくれた唯一の……。

「清水さんがコーチやめても。好きですから」

「……ああ」

美雪先輩が言った言葉盗み聞きしてしまったあたし。知ってたかのように表情をあまり変えていない清水さん。

「それじゃあまた月曜日、に」

「お。もう葵の家の近くか。判った。じゃあまた。今日は楽しかったぜ！」

清水さんはあたしに大きく手を振ってくれた。あたしも小さく手を振った。

素直になれて嬉しかった。部活動始まったら、また勝手に性格がきつくなっちゃうんだろうなあ。

でもあたしはあきらめない。栞ちゃんにも美雪先輩にも。

あたしは涙を拭いて屋敷に向かった。

永遠の思い出になるこの日を心の中に秘めて。

第21話「RE:START」? (前書き)

今回は石黒菜の回です

第21話「RE:START」?

私は小学校の時にいじめられてました。卓球に熱心になって、友だちとはあまり関わったりしなかったからだと思います。とても辛かった。

だから私はこの姫原女子中学に入って新しく始めたいと思います。卓球はもうしない。

「同じクラスだね！ 栞ちゃん！」

「うん」

幼馴染の田島夏奈子ちゃん。私の一番の友達。一緒にこの中学に来てくれた。

「仲良くできるのかな？ 新しいお友達と」

「できるよ。私もいるんだから。夏奈子ちゃんにいつぱいできるよ！」

「うん！」

夏奈子ちゃんは男の子が嫌いなんだけど、この学校には女の子しかないから大丈夫だよ。いつぱいできるはず。

「夏奈子ちゃんは夏奈ちゃんって呼ぶよ！ あと栞ちゃんだね！ よろしくー！」

元気よく話しかけてきたのは、佐藤さん。双子の姉妹らしくて、この子は友美ちゃんって言うらしい。

「よ、よろしくお願いします」

「敬語じゃなくていいよ！ みんなと友達になりたいから！」

いい子だなあ。友美ちゃんって。すぐに友達ができるなんて思わなかった。

「ねー三人とも！」

真美ちゃんの方がやって来た。

「あの子とも仲良くしない？」

友美ちゃんが指をさす方には、黒髪でツインテールの子がいた。なんか見た目的に無愛想な感じが……。不良だったり……。

「ねえねえ！ 名前は？」

ちよ、友美ちゃん行動が早いよ！ 大丈夫なのかな？

「……森川葵」

「じゃあ葵ちゃんね！ よろしく！」

森川さんは普通に返事して、友美ちゃんが握手を求めると普通に握手をした。不良ではないんだね。ならいいや。仲良くなれるかも。

「よ、よろしくです」

「怖がらなくてもいいわよ」

「は、ひゃい……」

「か、夏奈子ちゃん、怖がらなくても大丈夫だよー」

私はびくびくしてる夏奈子ちゃんの頭を撫でてあげる。

「あなたは？」

森川さんは私を見て尋ねてきた。

「えっと……石黒菜と申します！ よろしく願います！ 森川

さん！」

私は深く頭を下げてしまった。

「ちよっと……」

森川さんは少しやり過ぎだというように、席を立ちかけてあわてる感じになっている。

「は、はい？」

「こ、怖がらなくてもいいんだから。あたしもあなたたちと……仲良く、なりたいし……」

と顔を赤らめて言ってる。意外にかわいらしい。

「そ、そうですね！ よろしく！」

「葵でいいから。あとため口でいいから」

と淡々と話していく。

「じゃあよろしく、葵ちゃん！」

「え、ええ」

私は友美ちゃんと同じく握手を求めて手を出した。葵ちゃんはそれに応えてくれた。

このままいい学校生活になればいいのになあ。

幼馴染の夏奈子ちゃん。このクラスで友達になった、佐藤真美ちゃん。友美ちゃん。森川葵ちゃん。

ずっとずっと仲良しのまままで続いていけばなって、今は思います。

第21話「RE・START」？（後書き）

次回に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3209w/>

卓球少女

2011年10月23日21時12分発行